

丹保憲仁略史（その1）

昭和8年3月10日 北海道天塩郡豊富村にて丹保久憲・八千代の長男として生まれる

父 丹保久憲（ひさのり）明治34年5月1日生まれ

母 丹保八千代（やちよ）明治41年4月11日生まれ

- 丹保久憲：石川県能美郡国府村字小野巳 181 番地（昭和25年までの丹保の本籍地）で宮岸久作の長男として生まれる
- 丹保家は代々大聖寺藩で大工をしていたという。建築業丹保組を曾祖父の丹保寅松が営んでいた。祖父となる宮岸久作は一人息子で一人娘の宮岸すえと恋愛？最初の生まれた男の子を丹保家に戻すという事で婿入り。父久憲は生まれてすぐ？丹保寅松のところへ丹保家の跡取りとして戻される。父久憲の兄弟（宮岸）は弟2人妹一人が成人したが結核で2人が若くして死に、最後の末の叔父宮岸三郎は昭和21年元旦敗戦後のシベリア抑留で早々と死んだ。連れ合いだったトモおぼさんが再婚の際に一緒に宮岸を離れた一昌という父方のただ一人の従弟がいる。彼が高校生のときに通学列車で瞬時あったのが最後である。学校の先生をしているという。元気ならもう退職している頃である。父の母宮岸いと（小生の実祖母）も若くして（45歳で）結核で死んだ。宮岸一家は祖父久作が農業指導員として大正末に北海道へ移住し、篠津・壮瞥などで指導員として働いていた。戦争中の一時(昭和18年ころ)曾祖母宮岸すえと札幌の家で一緒に住んだ事がある。その後まもなく昭和21年8月9日2歳を過ぎて壮瞥で亡くなった。
- 父久憲は曾祖父寅松が営んでいた建築業丹保（小野？）組の跡取りとなるべく20歳ごろまで能美郡で働いていたらしい。寅松翁さんが事業に失敗して亡くなると、先に北海道に移住していた祖父宮岸久作を頼って北海道に来て、大正12島松の尋常小学校で準訓導として働き始めたようである。その後千歳の松園小学校を経て、昭和2年に新篠津尋常小学校の訓導となった。大工の棟梁となるべく磨いた腕は相当のもので、後に北大の前の札幌市北19条西3丁目21番地（小生の本籍地）に昭和25年に初めて自宅を新築したとき、家の内装工事はすべて父がした。（高校3年だった小生も手伝って天井を張ったりした記憶がある） 祖父久作は本当の祖母が亡くなったあと再婚していて、父はあまり近づかなかったようである。父久憲がどのようにして教員資格を取ったかは不明である。
- 私が祖父久作に始めて会ったのは、昭和14年の春に尋常小学校に入ったとき、急に呼ばれて壮瞥の家に行ったおりである。昭和火山が噴出する前で、今の山すその位置にあった胆振縦貫鉄道の壮瞥駅から泥んこ道を弟と父母4人で歩いていった事を覚えている。札幌師範付属尋常小学校一年生の時に始めて父方に祖父母(義祖母)と曾祖母がいる事を知って大変に不思議であった。祖父たちは父と母の結婚式にも出席せず疎遠

であったが、小生が小学校に入ったという事で急に呼び出された模様である。良いお爺さんであったが、家族の歴史には様々な屈折があったようである。祖父は壮瞥村の村会議員や洞爺の連合PTA会長などもしていたようである。

- 母八千代：岡山県士族小野実太郎と勢似の4男4女の子供の4女として明治41年4月上川郡永山村（屯田兵村）に生まれる。
- 小野実太郎と勢似の夫婦は明治18年岡山県から屯田兵として永山屯田兵村に入植する。石狩川の河口まで汽船で来て、小蒸気船に乗り換えて滝川まで石狩川を遡上し、上陸後馬の背に僅かの荷を積んで永山まで行ったと祖母の勢似がなくなる前の、昭和19年ごろに聞いた事を覚えている。長い農作業で腰がすっかり曲がっていたが、元氣な祖母は記憶が明瞭で昔の話をいろいろ聞かせてくれ、末の娘の子供の小生にこっそり飴玉やちびた鉛筆を呉れるおばあさんであった。
- 祖父実太郎は、倉敷天領の武士であったようで、維新後すぐに職を失ったようである。祖母の実家が裕福な商家であったとのことで、其の関係でしばらく働いていたのではないかと思う。あだ名を「暗闇の牛」と母や伯母たちが付けていたように、まったく無口な人で、小生は会話をした記憶があまりない。まったく怒る事の無い人であり、祖母のちゃきちゃき振りと対照的であった。日清戦争と日露戦争に共に従軍していて、北海道の在郷軍人では最年長者の一人であったようである。3月10日の陸軍記念日の閲兵には査閲官の前に、両戦役の従軍記章をつけて立った。あの暗闇の牛のようなおじいさんに鉄砲が撃てるわけがないから、兵站で馬でも追っていたに違いないと口さがない孫どもは囁いていた。太平洋戦争は今から60年ほど前であるが、実太郎爺さんが出征した日露戦争は、我々の子供時代の大東亜戦争当時から言えば40年にもならない近い過去の事である。昭和13年に野付牛（北見）の伯父（母の長兄で双葉堂という店を開いていた）のところで、祖父母の金婚式を祝い子供孫5人以上が集まり、新聞にも写真入で大きく報じられた。
- 小野一家は、昭和のはじめに永山を離れ北見(当時の野付牛と常呂)に移住した。母の長兄が北見で初めての楽器とスキーなどの当時で言えば先端の店（双葉堂）を一条の繁華街に開き、祖父は端野兵村三区に隠居した。末の娘である母は、長兄の店を手伝い、野付牛にはじめてできた女学校（現在の北見白楊高校の前身）の一期生となった。

昭和7年 丹保久憲と小野八千代は久憲が小学校教員として働いている天塩郡豊富村で結婚する：翌8年3月10日長男丹保憲仁生まれる。

- 昭和3年12月空知の美流渡で退職（小学校令が変わったらしく、退職金ももらっている）、昭和5年天塩郡豊富尋常小学校の代用教員に採用されている。翌昭和6年、訓導に復帰。
- 豊富には嘉納農場があり、講道館の嘉納治五郎さんが隅田川で見つけたというお地蔵

さんが市街から温泉への道の傍らの地蔵堂に祀ってある。そのお地蔵様に生まれた子供が大成するようにお願いしたという。小生が北海道大学の工学部長になり、父が他界した次の夏に、父が勤務した道北の各学校を母と家族とでめぐった折に、母が京都で求めてきた小さな灯籠を件のお地蔵様にお供えしてお礼を果たしたと喜んでくれた。

昭和8年3月24日 父久憲隣村の兜沼尋常高等小学校に転勤

- 生まれたばかりの赤ん坊のまま、隣村に移住。生地豊富には2週間だけいたことになるのであろうか。
- 赤ん坊の小生を連れた両親は、兜沼の菱の実取りなど生活をエンジョイして短い期間を過ごした後、山奥の単級校に移動となる。兜沼ではほとんど語ることが無い平穏な日々であったようである。

昭和9年4月 父久憲、天塩郡遠別町上遠別聖修尋常小学校(単級)校長として転勤。

- 上遠別(聖修)尋常小学校はその春に分校から昇格独立した学校で、青年学校を併設している。遠別市街(遠別河口にある)から川を10本もの吊橋を渡って10里(40km)遡上した山中の開拓部落の僻地校である。熊が常時出没する地であり、店は一軒もなくコメは取れず芋と稗のようなものが畑で取れる。5里下にもう一つの小学校と駅通があり小集落を形成している。上遠別からは月々の給料をもらうにも10里の道を徒歩で一泊二日かけて遠別市街まで往復する。夏は自転車に荷を積み押して歩き、冬はスキーでリュックを担ぐという形で父が遠別の町から帰ってくる。
- 父が吊橋を渡って帰ってくるのを日暮れに学校の門のところずっと待っていた事を覚えている。一斗缶(ブリキ製)に入ったいろいろのものが自転車の荷台に括りつけられてあり、その中に金太郎飴や幼稚園ビスケットなどが大量に入っていたことが思い出の中にある。記憶が初めて残っている3歳くらいの事である。冬に熊が出て、青年団の人たちが熊を撃って学校に持ってきて解体し、熊汁をみんなで食べていた事がおぼろげな記憶にある。
- セイという和犬を飼っていた。考えてみれば母方の祖母の名前である。このごろになってそうだったのかと思ひ返す。山奥の3年弱の間、唯一の毎日の友であったセイがおばあさんの名であったと考えたことはなかった。札幌へきてから、その頃の生徒さんであった谷口さんという方が母のところへ何度か、屯田の自宅を訪ねてくださった。

昭和10年2月21日 弟丹保睦敬(むつひろ)生まれる。

- 小生にとってたった一人の兄弟である。付属小学校、札幌東と北高等学校、北大工学部と二年違いでずっと同じ道を歩き、建築工学科を卒業して東京都に就職し、建築の諸課長ポストを歴任し、企画課長、営繕部長、財務局理事で退官した。東京都庁の新

庁舎(新宿)の計画段階からの責任者で、スペックの決定と設計・工事の発注入札から建設事務所長をかねて、建物が立ち上がるまでの責任者であった。日照権条例を美濃部都知事が作らせたときの首都整備局担当課長で自分の考え方とのギャップにずいぶん苦悩していたのを思い出す。今また、小生が放送大学に来て同じ千葉県(新松戸)に住んでいるがなかなか会う暇が作れない。

- 後に東京で働く事になる弟の睦敬は、町から10里山奥の真冬の積雪7~8mの雪の中で、父が近くの(といっても1キロ近くも離れている)おばさんに応援を頼みに云っている間に、母が一人で生んだのだという。へその緒も母が自分で切ったらしい。この部落は今では過疎地となり住む人もなく、天塩山脈横断の立派な道路が往時の校庭を切通しにして通っている。
- 父がなくなった次の年、母と家族を連れて聖修小学校跡を訪れたとき、校舎はすでになかったが子供のころの写真に愛犬のセイとともに写っている水仙の列が40年前のままに廃校のグラウンドの隅に咲いていた。母が最初に植えた水仙が歴代の先生か生徒さんが引き継いで、40年も咲きつづけていたのであろうか。連れて行った末の子がすでに小生の思い出のころの年を越えていた。終生忘れえない情景である。谷口さんのお家にちょっと寄せていただいて、その前を流れる遠別川にまだ残っているつり橋の一つを見てきた。
- 弟は成人するまでずいぶんと体が弱く、重い病を幾度もした。母が山の中で十分な栄養が取れず、お乳に問題があったのではないかと悔やんでいるのを何度か聞いた覚えがある。
- 単級の学校でも校長であるから、両陛下のご真影を掲げる奉安殿を放置できず、また山の女子青年に裁縫や様々なことを教える役を果たさねばならず、母は山を下る事ができずに弟を一人で生む事になったのではないかと思う。

昭和11年 皆既日食が上遠別である

- 単級の学校の職員室(校長室)は、一つしかない教室の隣で、校長住宅と繋がっている。住宅が一緒にある交番の状況を想像されたい。日食だという事で皆が立ち上がった。父の椅子の背にぶら下がって遊んでいた僕は椅子ごと床にひっくり返って、目と目の間の鼻面を椅子の横木でしたたか打ってしまった。いまだに眼鏡の鼻部分の陰に、傷が残っている。父が写した皆既日食の太陽のコロナと鼻の頭に絆創膏を貼ったその折の記念写真が懐かしい。
- 父はずっと写真を撮っていた。山の中でラジオも新聞もないところでは、本を読む事と写真を撮ることが唯一の楽しみであったのであろう。もちろん電気などあるはずがない山奥の部落である。明かりは石油ランプだけである。現像した乾板やフィルムを印画紙に焼き付けるのはランプの明かりである。もちろん、密着焼付けだけしかできない。それでも、そのころの写真がアルバムに残っている。僕の写真の趣味は父以来

のもので60年を超える。ちなみに、手の小さいそのころの僕の仕事はランプの火屋（ほや）を内側に手をいれて磨く事である。3歳から5歳くらいまでのお手伝いである。

昭和12年3月 幌延町安牛尋常小学校長として父が赴任するため、山を下り里に出る。

- 3月遠別川の氷が溶け、造材の馬櫓用の雪橋が流れ去る前に上遠別から10里の道をくだらなければならない。雪が解けるとつり橋と細い山道だけになるので、家財道具や子供は町に出る事が困難になる。3月に雪橋が解けて流れて川が開くぎりぎり前に馬櫓で遠別の町まで出なければならない。父はご真影があるので当時のしきたりでは、次の校長が山を登ってきて引き継ぐまで学校を離れる事ができない。そこで、冬山造材の馬櫓を青年団の人が引いて、母と私たち兄弟がいくらかの家財道具と共に先に山を下る事になる、10里の道であるから一日がかりである。運悪く僕ははしかにかかってずいぶん熱が高かった由である。母だけではしかの僕を連れ一才の弟を抱いて、覆いもない吹きさらしの馬櫓の上に角巻きと毛布に包まって、囊の中を湯たんぽで暖をとって一日がかりで山を下った。途中の事は少ししか記憶に残っていない。雪橋を恐る恐る緊張して渡った。御者をしてくれた人が融雪で端が崩れるのを心配したのであろう。
- はしかの小生も遠別の町に無事に着いた。生来、健康で元気だったのだと思う。遠別では、父が給料を取りに町に降りてきたときに厄介になる国部（？）薬局でお世話になったらしい。父が亡くなった後、家族で訪れて国部さんの大奥さんに暖かく迎えていただいた。町の電灯を見て、お月様がたくさんあるとあって「お月さまえらいな・・・」という歌を歌い出したので母は涙が出たといっていた。物心付いて初めて電灯を見たわけである。
- 父が山を降りてくるまで、両親が結婚し僕が生まれた豊富に行って、父が独身のころ下宿していた加藤さんの家でしばらくご厄介になった。着いた夜に近くの一軒の家が火事で燃えた。生まれて始めてみた火事であり、物心ついて隣家が見えるところにあるのはじめてである。鮮明に記憶に残っている。角巻きに包まれ、おばさん（加藤末子さん）に抱かれて火事を外で見たのだから、はしかは大分良くなったのだろう。
- 父が来て、幌延町安牛の学校に赴任して行った事はまったく記憶にない。初めて汽車に乗ったはずであるが、そのこともまったく覚えていない。3歳児の記憶は面白い具合に切れ切れである。
- 安牛の小学校も単級か複式であったろう。父のほかに先生がいなかったのが単級であったと思う。もしかしたら母が加わって複式を部分的にやっていたのかもしれない。宗谷本線の汽車が150mくらい先を走っていたから電気はあったのかもしれないが、ランプで暮らしていたように思う。ランプの火屋を掃除した記憶もあるのでもしかしたら、風呂場とか納屋がランプだったのかも知れない。

- 近くに安牛駅があり、駅の近くに山崎さんという小さな何でも屋のお店があった。初めて母についていってお店で物を買うことが普通に出来るようになったわけである。しかし自分でお金を使った記憶はない。山の奥にいたときは、父が遠別の町から運んでくるお菓子と母の姉である伯母さん達が送ってくれるものだけが玩具とおやつであった。もちろん、山葡萄などは熊さんと共有していたけれど。
- お金についての思い出がある。母が一枚のお金を出して、物を買って、その次にたくさんのお金をもらうのがどうにも不思議であった。一円を出して、五十銭銀貨や、十銭白銅貨、一銭銅貨をいくつももらったのであろう。おつりという事が4歳児の僕にはまだ理解できなかつた。いまだに金勘定に疎いのは小児時代の欠陥であろうか。小学校に入るころは、問題なく町で暮らせるようになったのだから大して心配するほどの事ではなかつた。
- 名前を思い出せなくなつたが、その小さいお店（山崎さん）には小学校の高学年か高等科のお兄さんがいて、毎日のように遊んでもらつた。すぐ先が安牛駅で、宗谷本線の汽車が日に数本だけ稚内と名寄を往復するだけであるし、乗降客もほとんどないも同様であるから、駅は格好の遊び場であつた。といつても、お兄さんと小生の2人で駅長さんの子供がいた記憶はない。風が長くもないプラットフォームから線路をまたいで、先の原野の上に高々とあがつた情景を今でもはっきり覚えている。天北原野にぼつんと立つ駅と駅前（近く）の店と、やや離れて（150m位か）ぼつんと建つ小さな小学校からなる小集落である。すぐ近くに他の家は無かつたように思う。
- 天北原野は泥炭地である。寒冷地の湿原では草や灌木が倒れても腐りきらず、腐植土として暦年に渡り積層して平原をつくる。50センチも掘ると茶褐色の醤油のような水が出てくる。極めて地下水位が高く、ふわふわした泥炭の軟弱地盤に家も線路も道路もやっと乗っている感じである。この時代に天北原野では米は取れなかつた。芋と麦ととうきびの世界であつたとおもう。それでも上遠別から見れば難であつた。
- 風呂の水は泥炭地の着色水であるから、入ると首から下は見えない。農家の井戸水は醤油様の茶褐色の水である。校長と駅長さんだけには、日に一回列車が給水タンク車をつないできて1分間の短い停車時間の間に、大きなバルブ（2インチぐらいもあつたと思う）を開いて、1斗缶（いまで言えば18リットルのブリキ缶）に大急ぎで流し込む。その時間がくると、母は天秤棒の前と後ろに一斗缶に針金の下げ手をつけたものを担いで駅まで行く。2つの缶を満たしたものが学校の一日の清水である。他の水は泥炭地の着色水である。洗濯も多分泥炭地着色水でしていたのだと思う。雨水を貯める天水桶もあつたように思う。散在する農家・牧畜の人は飲み水をどうしていたのであろうか。子供であつた小生に記憶はない。
- 駅を降りてまっすぐに行き左折するとすぐ学校がある。学校の前をまっすぐに行くと（もしかしたら学校に向かって折れずに駅から真っ直ぐにゆくと）天塩川の川べりに至る。堤防もなく河岸が垂直に2-3m崩れた下をとうとうと大河が流れていた。対

岸まで100mをはるかに越えていたようにおもう。対岸にわたるすべは、橋はおろか渡し舟さえなかったように思う。今はどうなっているのでしょうか。

- まさか長じて、自然の着色水（Peat Water）の組成や、着色成分の処理を研究主題の一つに選んで世界で仕事をするとは夢にも思はなかった。アメリカに留学しての研究テーマのひとつが有機着色成分の制御であり、博士論文の一部でもあり、後に北大丹保研究室のお家芸になるとは、運命の糸はいかにも不思議である。
- 1992年の国連宣言ダブリンアコードに「人類にたまねく1人1日あたり50リットルの清浄な水を配りたい」とうたっている事を、自分の終生の働きの中心部分に持ち続けて今日に至ったことは天がお命じになった事かもしれないと思う。もし小生の記憶が間違っていなければ、小児2人を含むにしても丹保家4人家族が一日40リットルの清水で暮らしていたわけである。もし母が2回列車に水汲みに行ったとしても80リットルである。ダブリン宣言に比してもものすごく少ない清水の諸費で小生の人生は始まったわけである。1日200リットル以上もの清浄飲用水を水洗便所にまで使う近代水道システムに疑問を感じるのもその出自の故であろうか。
- 昭和12年の冬（あるいは13年の正月ころか）弟が腎臓炎にかかり、稚内の病院では駄目で、旭川の赤十字病院に2-3ヶ月入院する事になった。小生にとっては稚内そして旭川と見聞する町はだんだんに大きくなっていく（といっても、知れたものであるが！）。しばらくの間、入院する弟に付き添う母とともに病室に泊込んで暮らした。旭川の近文アイヌコタンの人が作った30センチくらいのヒグマの彫り物を買ってもらって弟は病院のベッドで暮らしていた。この熊は長らく我が家の床の間にあった。弟は腎臓でその後も札幌でも危機を迎えることになる。
- その後小生だけが父に連れられて安牛に戻ったように思う。その時であったかどうか分からないが、父に連れられて稚内に行った。当時稚内は樺太の大泊と北海道を結ぶ稚泊航路の国鉄連絡船の発進港で、大栈橋ができたばかりであったように思う。この大栈橋は今も重要文化財で残っている。北大土木の大先輩の土屋さんの手になるものと伺ったことがある。そこにお店群があり樺太へ渡る人の今で言うショッピングモールを構成していた。其の一軒で、ブリキ製ながら周回線路を持ち、ねじ巻き動力で走る満鉄が誇るアジア号の模型列車を買ってもらった。生まれてはじめての大プレゼントで小学校時代まで大切に走らせた記憶がある。
- 夏のある日、安牛小学校の生徒さんの遠足について隣駅の幌延(本町)小学校までいった。4-6キロくらいの距離であったろう。4歳のときのことで、水筒を担いで元気いっぱいだった思い出がある。帰りは、汽車であり、家に帰ってランプの下で茶色の風呂に漬かって、よく歩いたとほめられた記憶がある。
- 父がなくなった（昭和49年9月21日、享年73歳）次の年（昭和50年）の夏（8月初旬の1週？）、母を連れて家族みんな安牛小学校を訪ねた。学校統合で幌延の本校に既に吸収され、廃校にされていたが、そこそこの大きさの学校であり、歴代校長

の額がまだ廊下にずっと掲げてあった。父は、2代目か3代目であったようで列の初めの方に写真があった。今はそれからもう30年もたっているのではなっているであろうか。そのときは廃校になったばかりであったので、もちろん電気も来ていたし、水道もきれいな水を出していたし、グラウンドも広がったが、門の横にあった奉安殿はなくなっていた。

昭和13年6月、父が留萌小学校に転勤となるが、そのまま札幌師範学校の特別コース（講習？）に入学することになって札幌へ出て、琴似に住む

- 僻地校での努力を認められたのであろう（？）か、優良教員の特別講習に父が参加することになって札幌へ出てきた。小生5歳弟3歳の春であったように思う。琴似の道立農業試験場の近くに家を借りて、父は琴似から札幌の南端にある札幌師範まで10キロくらいの道を毎日自転車で通っていた。父は当時の寸法で言えば5尺そこそこの短軀で比較的華奢な人であったが、上遠別の10里の山道で鍛え、田舎の学校で青年団といろいろなことをして体力はずいぶんあったように思う。今でも地下鉄で30分以上の距離である。この講習で、選抜されて正規の訓導の資格が確かなものとなったのではないかと思う。
- ある日、父が夕方急いで帰ってきた。札幌飛行場に国民が献納した戦闘機が来ているので僕らを連れて見せに行くというのである。師範学校の仲間から戦闘機が札幌飛行場にきたことを聞いて、10キロの道を走って息子に飛行機を見せようと帰ってきた父は、琴似と新琴似の間にある札幌飛行場まで、自転車の前に弟を乗せ、後ろの荷台に小生を乗せて、さらに4キロあまりの道をとということになった。どんな飛行機だったか良くは覚えていないが、複葉の木骨に布張りの最後のころの陸軍戦闘機（九二式か九五式？）であったように思うが、記憶は定かでない。其の後の戦闘機は、金属製の単葉の96式からゼロ戦、一式戦（隼）に進んでゆく。当時の札幌飛行場は、現在の北大のキャンパスの北端に接していて、小生の屯田の自宅と北大の丁度あいだに広がっていた。いまの札幌北高等学校のあるところが当時の飛行場の正門である。戦時中は練習機赤トンボやグライダー訓練に使われていて、現代の飛行機には小さすぎ、街中すぎて、敗戦後すぐ廃止されいまは密集した住宅地である。
- 琴似で住んでいた家は、琴似駅から札幌より300mくらいの函館本線の脇であった。夕方父が自転車で師範学校から帰ってくるのを家の前でいつも弟と見ていた。さらに札幌よりの200mくらいのところにある札幌競馬場の踏切を渡って父の自転車がこちら側に出てくる。上遠別の吊り橋を山の学校の校門から眺めつづけて、町から帰ってくる父を日暮れに待っていたことの札幌版である。あるとき、長い長い石炭列車（セキという貨車の列）が重連の蒸気機関車に曳かれて札幌の方から家の前の線路を琴似駅のほう（目的地は小樽築港であろう）へ、「シャン・シャン」というセキ独特の列車音をさせて通り過ぎた。先頭は琴似駅に達しているのに後尾はまだ札幌側の桑園駅の

辺である。100両近くも連結していたであろうか、数を数えたが忘れてしまった。日本で見た一番多数連結の列車であった。長じて、カナダのバンフのループトンネルで長い長い貨物列車を見たときに、5歳の琴似のことを思い出した。20代になってウィリアム・サロヤンの短編を読み、黒人の子供が日暮れにシルエットになった列車に手を振ったが誰も手を振り返してくれなかったという話を読んだときに、思い出したのが子供のころの長い長い石炭列車がシャンシャンと過ぎていった夕景であった。サロヤンのこの小説を読んでから、乗り物に乗っていて誰かが手を振っていたら必ず手を振り返す(wave back)ことにしている。

昭和年13年秋からの短い留萌の暮らしがあった。

- 札幌での父の勉強が終わって晩秋に、赴任地の留萌尋常高等小学校に戻ることになる。留萌小学校は高台にあり、我家は学校がある高台の海際の崖ぶち上にある。家の西側の10m足らずの畑を過ぎると、すぐ崖となりその下を単線の増毛線が走り、線路の先はもう海岸である。家の横手に立つと、目の前に日本海が広がり、北北東の水平線に天売・焼尻島らしい島影がかすむ。眼下に波打ち際が広がる。留萌港に小さな蟹を取りに行ったり、家の下の瀬越の浜で遊んだり、生まれてはじめての海辺の暮らしをした。南には増毛の連山が連なる。
- 比較的短い間の居住だったので、留萌の思い出は余り多くない。冬に日本海から瀬越の崖の上にまともに吹き付ける風と雪嵐は凄かった。大きな小学校に父が初めて勤めたことになる。家から50m足らずの至近に留萌小学校の屋内体操場があり、田舎の学校に比べて大変に広いと思ったことが記憶に残る。冬のある日、飼っていた白いウサギが大きな声で鳴いた。飼箱の外から鼬に襲われたのである。ウサギが大きく鳴くことを初めて知った。昭和13年の留萌での生活は一家にとって平穏無事の日々であった。
- 瀬越の浜の崖の上に住んだ5歳から6歳になる春の記憶の最大は、日本海のニシン漁である。留萌から増毛に至る瀬越し浜はニシンの水揚げ場である。朝早く(もしかしたら夕方だったかもしれない)大漁旗を立てたぼんぼん蒸気船がニシンを満載した何隻もの桙舟を引いて天売・焼尻の方から浜に帰ってくる。岸に突っかけた桙舟から歩み板をわたって、背中の木製の背負子にニシンを溢れるばかりにしょい上げたヤン衆(出稼ぎのニシン漁夫)が浜にずっとならべられた五右衛門釜のような大きな鉄釜にニシンを次々と放り込んでいく。釜で煮詰めてニシン糟とニシン油を取るのだという。崖の上から眺めるだけだった、子供の頃の記憶はいまひとつ定かでない。ポンポン蒸気船に曳かれた数隻の桙舟の船団が、何列にもなって、何段にも分かれて浜に帰ってくる壮大な最盛期のニシン船団と漁場の光景が目には浮かぶ。
- 当時の北海道の春は町じゅうがニシンを焼く匂いと煙で充満していた。蝦夷が島ではニシンは一匹二匹と買うものではなく、一箱二箱で買うのが普通であった。ニシンは

小骨が多く油が強く、子供の小生が喜んで食べる魚ではなかった。まだ青く活きのいいのは、「ぬた」にして食べさせてもらった。数の子・白子は従って北海道の子供らにとっては貴重品でもなんでもない。箱で買ったニシンはせいぜい数匹だけをすぐ食べて、後は開いて干物にして食べる。トコトン干して身欠ニシンにして冬に大根とニシン漬けにする。京都まで行くとニシンそばとなる。いずれにしても今日のように珍重されることはなかった。ニシンの絞糟を田んぼにまいて肥料とする（金肥）のであるから、いくらたくさんニシンが子を産んでもたまらない。日本の米生産は鎖国以来幕末まで、蝦夷が島からの金肥（ニシン粕肥料）まで水田に投入し、太陽エネルギー（グリーン）文明の極限まで成長し、飽和して崩壊した。小生が大学生になる頃、ニシンは北海道の海から姿を消した。（このごろは又少し獲れるようである）。白子で海面が真っ白になることを「くきる」という。その最後の一時期を、留萌の瀬越の浜で見た。肥料はその後化学肥料になり、グリーンでない緑の革命が始まる。

昭和 14 年春札幌へ出る事となる。

- 4 月には小学校に入ることになる。今の歳で 6 歳、当時の数え年でいうと 7 歳の春である。父と母がなにやら相談したらしく、出来れば札幌で教育したいということになったらしい。安牛の小学校で教室に潜り込んで生徒と一緒に父の授業を受け、4 - 5 歳で一年生のところは終わり、上の学年のこともすこしは齧っていたらしい。出来れば、町の学校、それも北海道では一番らしい札幌師範の付属尋常小学校に入れたいと両親は思っていたらしい。前年に師範の講習教育に行っていて付属小学校を親父はつぶさに見たらしい。教育パパ・ママの始まりか？
- もし付属小学校の入学試験に小生が合格すれば、父は教員を休職して一年間師範学校の専攻科に入ることにしたいということになったらしい。田舎暮らしで母がためた貯金で 1 年間の休職浪人と小生の入学は何とかなると母が言ったらしい。専攻科を出れば、中等教員の免許がもらえ旧制中学や女学校の先生にもなれる。専攻科の年齢制限が 30 歳台であり、父はちょうど 39 歳でぎりぎりであった。まず、父が札幌師範専攻科の選抜に合格し、おじさん学生になる資格を得た。後は、小生が付属小学校の試験に合格すれば札幌へということになる。札幌での一家の苦勞の始まりである。
- 3 月、付属の試験を受けに札幌へでる。時計台の前の丸惣旅館に泊まる。昼食を三越で取る。大阪寿司の押し寿司であった。田舎にはないおいしいものであったことを今も覚えている。一つ一つがすべて新鮮なことごとであった。少し熱があったようであるが生来頑健な小生はあまりへばることがなかったらしい。
- 入学試験といってもメンタルテストに毛の生えたようなものである。迷路の問題や電車の絵を見せてどちらの向きに走っているかなどがあり、他はあらかた忘れた。家族のことを聴かれたように思う。電車など見たこともない田舎坊主であるが、5 歳の琴似の短期の在住と、町中で見た電車の強い印象ですぐに正解がわかった。先の 2005 年

秋札幌の奥座敷といわれる定山溪温泉で付属小学校（国民学校）の昭和20年卒業60週年の同期会が開かれ、20人ぐらいの爺さん婆さんが集まって、入学試験にどんな問題が出たかについても語るがあった。よく覚えている人、全く記憶の外の人さまざまであり、65年もの昔のことである。幸いにも合格が決まり。一家は短い留萌在住を終えて、札幌での親子の師範学校共学（師範学校専攻科と付属尋常小学校）の暮らしにはいる。母の悪戦苦闘が始まるわけである。

昭和14年札幌師範付属尋常高等小学校の尋常科一年生となる（山の子町へ出る）

- 電灯を始めて見てから3年後ではじまる都会暮らしである。順応力のある子供には何のこともなかったが、さまざまな事が次々と起こる事になる。今に至る人生の少なからぬ事がこのスタートラインのころに始まる。山で熊の近くに育った、今様で言えば、ちょっと弱い金太郎・ターザンの文化大革命といったところであろうか。
- 札幌で住むことになったのは、南9条西16丁目の幌西小学校の前の町内の東向きの角地の借家である。大家は竹見さんといった（この大家さんとの間に10年戦争？が後に起こる）。一軒家で、裏の西側に畑があり家の右手南側には道路との間に小さな花畑があり、東南の角には大きな雲龍（と聞いた）柳の一本がある。左（北）隣は杉村さんという医学部の先生の一家で、学位を取る最後の時期の方らしく、次の年には函館へ赴任してゆかれた。やさしいお婆さんと「ヒンちゃん」という小生より少し小さい子と赤ちゃんがいた。そのまた北隣は橋本さんで、小父さんは学校の先生で長男は僕より一年あとで、北大の医学部に後に進み医者になったヒデアキ君がいた。かわいい妹さん達は何人もいた。そのまた北は小路を経て岡見さんという50m四方もある大きなお屋敷で、1年上と3年上の付属小学校の先輩生徒がいた。
- 家の右手(南側)の裏へ進むと幌西小学校に通じる道をはさんだ隣は福岡さんで、小父さんは北海道庁の農務部長を後年された方で、小生の終生の親友赤岩英夫君の父上と北大農業経済の同級生であり、次男がまだ赤ん坊であったが後に北大土木の小生と同じ河川の研究室の後輩となり後に広島大学教授となる福岡捷二君である。その裏に小山田さん、瀬川さんと家が並び、瀬川さんに五郎ちゃんという一年上の幌西小学校の遊び仲間がいた。広い芝生の庭でよくあそばせてもらった。その先を3軒ほど西に向かうと、これまた終生の友人となる佐々直道君の家である。藁の上からの養子と自称する彼は、佐々さんの小母さんの姉の子で当時は西村君といった。お父さんは北大地質の教授で、後に日本山岳会の会長を務め青函トンネル生みの親の一人である。小生の人生に大きな影響を頂いた一人であり後にまた記したい。その先二軒目はもう幌西小学校の前の通りで、小原さんという雑貨のお店が学校に面してあった。
- 家の裏の畑を隔てたところに、YY(苗字を思い出せない)さんのお家があり、同じ年のカコちゃんという女の子がいた。ずっと西にゆくと同じブロックの西南の角の小学校に面した向きに幌西堂という文房具と学用品のお店があり、ノートなどをしばしば買

いに行った。元学校の先生だったという小父さんが店番をしていた。お店の北隣の我が家のブロックの裏手の北西角が小さな白塗りの木造の協会で、クリスチャンの佐々君の小母さんの影響でもあったのか直道君とたまに出かけて、ダビデの話の紙芝居などを見たりした。

- 尋常小学校一年生になった昭和 14 年は記憶に残る大雪の年であり、入学式の時にも雪が屋根から地面まで連なっていた。僕の家から付属小学校までの距離は 10 町(1km)あまりで、大人の足なら 15 分というところである。入学式の日には母に連れられていったはずであるが、その記憶はまったくない。南 9 条西 16 丁目の家を出て、東に一丁北に一丁(札幌の 1 丁はほぼ 100m)行くと、西 15 丁目通りを南一条の付属小学校から南 20 条の師範学校本校に向かう山鼻西線の南九条の電停に至る。ここから、北行きの電車(単線で電停にかわし側線がある)に乗ると、次は南 6 条、南 3 条の電停となり付属小学校校庭の南西の角となる。そこで降りて校庭をつききっても良いが、正門に行くには電車は南 3 条通りに至って右折し、14 丁目通りで運動場の塀に沿って左折し北進して、南 1 条の山鼻西線の始発点にいたる。この西線は今も残っていて、南 3 条と 1 条の間は迂回しないで直線化し、付属のところは札幌交通局前となっている。学校は 2 条小学校となっている。付属はその後 2 回移転して、今は石狩に近いところの北海道教育大札幌校の中にある。
- 南 9 条電停のところに母の名前と同じ「八千代堂」というお菓子屋さんがあり何かの時にはそこを目印にきなさいと母に教えられた。その隣に越後屋という雑貨屋があった。南 9 条の電停と自宅のちょうど中間のところに、上埜康雄君(今はロスアンゼルスでデザイナーをして元気である)というずっと仲良くしてもらった同級生の家があり、お父さんは市立病院の耳鼻科の医長さんであった。この子はしっかりしていると随分かわいがっていただき、何かと教えていただいた。当時まだ赤ん坊だった末の弟さんはいま時計台の近くで叔父さんをついで上埜耳鼻咽喉科を開業している。札幌医師会の副会長をしていたと思う。小母さんには長じてもいろいろと気を使っただき、教授になってから講演をしたときなどにも、何度も聴きにきていただいた。
- 電車道をはさんだ東側の 14 丁目に終生の親友となる赤岩英夫君の家がある。彼の弟妹はみな付属であるが、彼だけは佐々君と同じ、幌西小学校であり、旧制の庁立札幌第一中学校からクラスメートとなり北大で大学院までを共にし、その後もアメリカ留学・工学部長・学長・学術会議会員をすべてを、それぞれほとんど同時期に北大と群馬大学の助教授・教授として並行的に歩いてきて、今日に至っている。2006 年現在も、小生は千葉幕張の放送大学長で、彼は群馬大学長の後に千葉大学の監事として車で 10 分のところにいる。赤岩君のお父上は北大土木専門部の教授、北海道教育大の教授をされた経済学の先生で、お母さんとおばあさんにいつも親身のお世話をいただいた。
- 付属小学校の制服は白襟のかかったステンカラーの上着に半ズボンであり、折れ曲が

った三角帽子の先に 1~4 年までは赤いぼんぼり、5 年以上は白いぼんぼりをつける。1~4 年までは男女組、五年以上は男子組と女子組に分かれる。1~4 年までは単式と複式という学級編成であり、1, 2, 3, 4 年単式と 1・2 年 3・4 年複式という 6 学級編成になり各学年はそれぞれ 1 組半ずつの生徒がいることになる。僕のような早生まれの体力弱ちびの大半は単式に入れられる。同時に 4 月生まれの比較的大きな子もバランス上単式に配置されていたように思う。複式には良く育った元気の良い子がいて、一級上の子と組んでいるわけであるから、喧嘩をすると単式の 1, 3 年は勝ち味がない。ということもあって、付属では喧嘩を見た事がほとんどない。尋常科の上に、高等科 2 年の課程が一クラスあり中学へ行かなかった人が学んでいる。高等科を経由して中学へ行く人もいる。

- 入学式の次の日、家は引越しで忙しかったのであろう、多分学校へ行くのは母が送ってくれたと思うが、帰りは大丈夫だといって一人で帰ることになった。学校の正門を出て右折し 15 丁目通りを南に電車道に沿って進めば、南 9 条電停前の八千代堂菓子店に 20 分くらい後にはたどり着くはずである。しかしながら行けども行けどもそれらしき景色にはならない。道の両側は 2m にもなる雪の壁である。電車線路と道が雪の壁で二分されていたのであろう。まったくどこか判らなくなって、迷子になってしまった。桶屋さんがあって、店先で働いている人がいたので住所をいって道を聞くと全然違うところに来てしまったらしい。親切にも送ってくれるという事で、戻って南 9 条の電停の所まで来た。「八千代堂」があった。母の名前の店に来ることが出来て、「ここまでくればもう大丈夫です」といって」御礼を言って何とか無事に家にたどり着いた。母が御礼を言おうとしても誰がつれて戻ってくれたか判らない。どこの誰かを聞いておかなかった事を叱られた。後で考えると右折すべき 3 条通りを電車道と反対に左折して、南 3 条通りを西に向かうべきところを、逆に東に向かい西 10 丁目くらいまで東進してしまったようである。そのときは何処へ行ったか思い出す由もなかった。大分経って、この家ではなかろうかということを出して母に話したが、その事を覚えている店の人はいなかった。
- 担任の先生は実吉安久先生というベテランの堂々としていてやさしい先生で、父と知り合いでもあったらしく、田舎から出てきた小生にそれとなく気を使って親切にして下さったように思う。同級生みんなが「大変良い先生に受け持たれた時代であった」と年をとってからのクラス会の折などに懐かしく思い出している。お正月に三越でお会いしたら、お年玉に鉛筆を一ダース買って頂いてしまった。
- まだチョコレートが店で買える時代であった。チョコレート（板チョコ）とキャラメルは 5 銭と 10 銭の二つのサイズがあり、電車賃は 5 銭であった。雨が降ったら電車に乗りなさいと 5 銭玉をもらっていた。これで、小さい板チョコか 10 粒入りのキャラメルが買えるなと思ったが、雨でも電車には乗らず、チョコも買わなかったように思う。古谷のウインターキャラメルが一番おいしかったように思う。付属の 1 年下に古谷君

がいた。また後に札幌 1 中に入ったときに同じ一年 4 組にも古谷君がいた。古谷製菓の一族であった。尋常科 1 年生になった昭和 14 年は、シナ事変（日中戦争）が泥沼化し始め関東軍がノモンハン事件でソ連軍に大敗を喫した年である。僕は本当のチョコレートを知っていたが、2 歳下の弟は敗戦後のハーシーといった米国製の板チョコから本当のチョコレートに接したようである。ブドウ糖のまがい物が売られ始めた頃である。

- 一年生の国語の教科書は、「サイタ。サイタ。サクラガサイタ。」で始まる。我われの時はカタカナから習った。国定教科書は北海道から沖縄までひとつであるから、北海道ではさくらが咲きようも無い。変だったと気がついたのは、長じて、四月に爛漫と咲く東京や京都の花を 4 月に見てからである。まことにトロイ感性である。ちなみに、2 年下の弟が入った昭和 16 年は、もう尋常小学校でなく、国民学校初等科 1 年生で、教科書も「こまいぬさん。あ。こまいぬさん。ん。」にかわっていた。ひらがなから始まったように思うが自分の本で無いので記憶がない。この年の冬、3 年生の昭和 16 年 12 月 8 日に大東亜戦争（戦後太平洋戦争と称されるようになる）がはじまった。

昭和 14 年は我が家にとって苦難の 1 年であった。

- 順序は良くわからないが、弟睦敬が次々と病気になり、我が家の経済計画がほとんど破綻する。あまり丈夫でなく旭川の赤十字病院へ入院したのと同じ腎臓病が再発し危険な状態にまでなる。今となっては病名はわからないが、浮腫んできて元気がなくなってしまう。同じクラスの佐久間君のお父さんが、往診してくれる。
- 佐久間病院は付属小学校の正門の 50m くらい先にある小児科で、同級の俊直君がおり、彼は後に北大を中退してバレーをやり、NHK の初代（？）の体操のお兄さんになった。弟の信直君は後に小生の弟と付属で同じクラスになる。後に小児科医になるお兄さんと妹さん 2 人の兄弟姉妹である。俊直君は 2004 年なくなり末の妹さん陽子ちゃんに 60 年ぶりでお目にかかる。修道尼として病院を預かっているらしい。佐久間君は妹さんの病院でお世話になってみまかった。幸せな男である。
- リンゲル注射というのは今頃の点滴と違って、ガラス瓶を敷居につり長いゴム管の先に 10 センチもあろうと思はれる太い針がついている。うち腿に刺すのであるから 4 歳の弟には大変なことであつたらう。たいていのことには鈍感な小生も、その景色を思い出すと今でもブルツとなる。水ものめず、リンゲルで生きているようなことで、次第に衰弱してくる。隣の杉村先生も見てくださる。どういふことであつたのか、華岡先生も加わっていただき、おかげさまで何とか死をまぬがれた。華岡小児科は後に小生が進む庁立札幌一中の近くにあり、おっかない先生で有名であり、華岡青洲の子孫であるという。小生が札幌一中に入った昭和 20 年春、具合が悪くなって下痢が続いた折（おそらく栄養失調で消耗したのだと思う）、中学生を小児科は見ないのであるが君なら仕方ないといって学校の帰りに見ていただいたものである。

- 加えて、冬近くであったと思うが、弟は今度はジフテリアと猩紅熱らしきものに続けてかかってしまう。時効になった今であるから言うが、お隣の杉村先生が見てくださり家で安静にして養生して直していただいた。ジフテリアはのどが閉塞してはいけない病気のようなのであった。猩紅熱は伝染性はあまり強くないらしかったが、治りかけの皮膚の皮がむけるときの伝染性が強く危険とのことであった。弟の皮がはげかかったとき、手足の薄皮をむいてやったが小生は大丈夫であった。その後猩紅熱の話を聞かないが、過去の病気になったのであろうか。いずれにしても小生は丈夫であった。
- 佐久間君のうちへよく遊びに行った。あるとき、シュークリームを頂いた。山の子にはまったく味わったことのない珍味であった。世の中にはこのようなものがあるのかなと思ったことを忘れない。このようなお菓子はすぐに戦争で身边から姿を消してしまったので、なおさら印象が強かったのであろう。熊のプーさんが蜂蜜以上の文明の味を知ったようなものである。
- 弟がしばしば大きな病気にかかり、身近のお医者さんが大変に良くして下ったけれども、一年休職して無収入でも何とかいけるという一家の計画は早々に破綻してしまった。父は鳥海さんという病院のお嬢さんの家庭教師をし、母は内職を始めた。今でも覚えているのは、火野葦平の「麦と兵隊」という映画を見せに僕を連れて行くと父が言ったときに、母となにやら言い争いになり結局は連れて行ってもらえなかった。たぶん母の財布にはお金が無かったのだろう。日中戦争の除州作戦のときの映画である。後年、中国に招待されて家内ともども鄭州から開封へ、黄河のほとりを車で走ることがあった。行けども行けどもの黄金波打つ麦畑であった。蒋介石軍が日本軍に追われて退却する際に、黄河の右岸堤防を切って、多くの人を死なせたということを書いた碑があった。生涯で最も印象的であった黄河の落日とともに、見ることの無かった映画「麦と兵隊」を思い返していた。
- 少年倶楽部は50銭で母の内職の収入があるときにたまたま買ってもらった。我が家では漫画を買うことは無く（読むことを推奨されていなかった）、のらくろ、冒険ダン吉などは、少年倶楽部で時々見る（連載はもう終わっていたように思う）ほかは、単行本は友達に見せてもらったように思う。
- 近所の上埜君の家へいたり、佐々君と裏の畑で塹壕を掘ったり、岡見さんの大きな家の縁側でクリスタルガラスのすばらしい光に魅せられたりして、山の子は次第に視野を広げていく。岡見さんの子供用自転車が小さくなったので、譲ってあげるといつてくれたが、我が家にはその代価が無かった。幌西小学校の裏に佐々君の家の畑があり、その西に小川が流れていた。今、西20丁目かの少し東である。佐々君と終日石ころを積んでダムを作り川を溢れさせようと試みたがだめであった。小さくても川は川である。冬は雪の城を作りツララを折ってきて城壁に飾りとして立てめぐらし、近所の子供たちと雪合戦に余念が無かった。先の川を渡って5丁ほども行くと、円山の南斜面とその先が双子山で、家からスキーを履いて20分ぐらいの距離で、冬の天気

の良いつもすべりに行ったものである。そりを持って弟がついてくるが、すぐ手が冷たくなって泣きべそをかくので小さいときの弟は大変だった。雪に隠れた肥溜めに落ちて大変なこともあった。

- 自宅の前に道路を隔てて、住宅地にはふさわしくない、唐原さんという養鶏所があった。卵をよく売ってもらったように思う。今でも覚えているのは、トラバサミ（鉄製の罠の一種）をかけて、えさを盗みに来るカラスを捕まえていたことである。たぶんその後、殺していたのだと思う。家に空気銃があったので（上遠別の護身用だったのであろう、戦争に負けた後解体してしまった。山に入るときに、両親はマンドリンと写真機とともに持って行ったらしい）、それを持ち出してカラスを撃つてみたがまったく当たらなかった。今なら街中での使用は禁止ものである。
- この年最後に来たカタストロフィーは年の暮れ、もしかしたら昭和15年の正月か、父が再任用のための身体検査をした折に、結核を疑われたことである。父の実母、弟と妹3人が結核で亡くなっている。父の生家宮岸家には結核の災いがあった。教職復帰を前提にした1年の休職が、資格を得ても戻れないかもしれないということである。真っ暗な毎日であったと思う。子供にもその大変な状況はわかったが、その程度は両親とは比べ物になるはずが無い。幸いにも、精密検査を繰り返して復職可能となり我が家は最悪の危機を脱した。
- 隣の杉浦さんのヒンちゃんの一家が学位を得て函館に帰るということで、薄野のおすし屋さんにご招待いただいた。山にはありえない、生ずしの大きな桶の盛り付けを見たのはこれが最初である。味は忘れてしまったが、桶いっぱいのお寿司の情景は忘れえぬ記憶である。かくて山の子は、海の幸のスタンダードを知る。今日に至るすし好きの始まりである。その後、杉浦先生の音信は消えてしまった。軍医さんとして出征して亡くなったのではないかとか聞いた。この前後の年次の医学部の方の少なからぬ数が、ミッドウェイで戦没されたとも聞いている。

昭和15年4月父が単身赴任で天塩管内にもどる

- 父が留萌の北の苫前郡力昼小学校に赴任することとなり、我が家は単身赴任の父と母子家庭に二分される。経済的危機を脱したし、弟もあまり病気にかからなくなって、我が家は一応の平穏を回復する。父は月に1-2回帰ってくる。今と違って苫前・留萌・旭川・札幌は列車を乗り継いで7時間以上かかったのではないかと思う。それでも父が帰ってくるのをみんなで楽しみにしていた。札幌の自宅では父がいないので寂しいであろうということで、ラジオを買うことになった。今のテレビのようなものである。やがて太平洋戦争が始まり、ハワイ強襲もマレー沖海戦の緒戦の大勝利も、敗戦の天皇の放送もこのラジオで聞くことになる。
- 尋常科2年生まではこのような暮らしが続く。シナ事変（当時に名称）は硬直化し、汪精衛政権が上海に成立、近衛内閣が誕生し、大東亜新秩序の方針が決定され、アメ

リカは石油・くず鉄の輸出を制限し、航空ガソリンの西半球以外への輸出禁止が始まる。国内では米穀の配給統制規則が交付され、砂糖・マッチが切符制になる。武力行使を含む南進策が大本営政府連絡会議で決定され、日独伊三国同盟が調印され、日本軍が仏領インドシナ北部に進駐する。いよいよ太平洋戦争前夜であるが子供にはまだ良くわからない。チョコレートはかくて店頭からあつという間に姿を消し、たった2歳下の弟には戦前のチョコレート体験が無いことになる。

- 夏休みにはラジオ体操が南9条電停の「八千代堂」前で毎朝行われる。付属小学校は全市に生徒が散らばっているので、幌西小学校のグループの中に入れてもらう。リーダーは青柳さんである。3年先輩で、後に札幌一中で3級上の級長をしていた、北大を経て後に農林中央金庫に勤められた。当然優等生であり、間違いなく4年生から旧制高等学校または北大予科に飛び進学して中学の最高学年の5年生にはならない。終生の親友の赤岩君もこの中にいたはずであるがこのときにはお互いに意識することは無かった。後で赤岩君などと記憶を確かめたところ、4年生250人の内10%前後の優等生はほとんど飛び入学をしていたらしい。古い時代はどのようであったか定かでない。ちなみに、我々の学年から、新制高校に再編成され飛び入学は無くなり、高等学校3年までゆっくり勉強して、新制大学にまっすぐ行くことになる。弟さんの青柳謙二さんも2級上で後に北大のドイツ語の教授をされ、小生が北大総長のとき文学部長でいろいろと助けていただいた。
- 弟の健康も回復し、6月の札幌神社のお祭りには北見から祖父母や伯母さん達が見物にやってきた。創成川の上にサーカス小屋が川を跨いでかかり、ジンタの響きが懐かしい。木暮サーカスというのが一番大きかったように思う。ブランコ乗りが一番面白かったし、ライオンの火輪くぐりが恐ろしかった。狭い樽の中をオートバイがぐるぐる上下に回るのが脅威であり、直径10mくらいの樽のふちの観客席の振動は今でも体が覚えている。
- お祭りの一番の楽しみは、創成川からの帰りに買ってもらう、一束のバナナである。50銭銀貨一枚であったように思う。バナナは貴重品になりつつあったが、まだ屋台でも買えた。お祭りに行くからと先に玄関を出て、母が戸締りをする間に玄関脇の雲竜柳に登って道行く人を眺めているうちに墜落して気絶をしてしまった。気がついたら座敷に寝かされていた。目が回ってしまっていたが、しばらく休んで、結局は祭りに行ったのだと思う。小生は、子供のときに3回墜落して脳震盪？を起こしている。一度目は3歳の冬、上遠別の山の学校の屋根からそりで滑り降りて遊んでいた折に、母屋の軒とそれに連なる下屋の薪小屋の間に隙間があり、隙間から零れ落ちて薪小屋の床に櫓ごと打ちつけられたのが一回目である。ぼっかり雪穴が開いて空が見えたのを今でも思い出す。2回目は、上記のお祭りである。3度目は、後に引越す南6条西13丁目の家の裏庭のポプラの樹のずいぶん高いところから大火事を見ていて母の不在中に墜落し、後述する近藤さんの小母さんに介抱していただいた時である。それ以後は

気絶していない。

昭和 16 年 1 月父が帰ってきて一家がまとまる。

- 単身赴任の父が、昭和 16 年新春に新琴似尋常高等小学校の訓導として札幌近郊の新琴似尋常高等小学校に転勤してくる。当時新琴似は札幌飛行場の北に広がる農村で市外であるが、今小生の家のある北区屯田はそのまた北 1 km であるから、今はれっきとした札幌市内である。昭和 18 年には教頭となり、昭和 19 年 3 月まで 3 年以上勤めることとなる。一家はようやく札幌に定着することになる。
- 南 9 条西 16 丁目の家から、父が赴任してきた新琴似国民学校（4 月から国民学校と改称される、弟はこの年付属国民学校最初の一年生になる）までは、札幌駅あるいは桑園駅まで電車で行って、そこから札沼線で一駅である。札幌を南北に横断する約 12 キロの道のりである。冬は電車と列車によるほか無いが、夏は体力さえ許せば北に進み、6 キロほどで北大に達し、北大の前の西 5 丁目線または北大裏の茨戸街道をまっすぐ北上してさらに 6 キロほど行けば自転車で 1 時間半の距離である。父は夏と冬をそのようにして 3 年通った。上遠別の 10 里の山道と 10 本に及ぶ吊橋をわたって上り下りしたことに比すれば何のことは無いといっても、毎日のことであり大変なことである。小生の付属までの徒歩通学 20 分を確保するために親が払った努力である。有り難い事である。

昭和 16 年 4 月弟睦敬も付属国民学校に入学する

- 弟が 4 月に付属に入学してくる。これから北大工学部を卒業するまでの 20 年間いつも 2 年の時間差で同じ道を弟と歩くことになる。自意識がついてくると、丹保の弟であるといつも言われるのはなんとなく愉快ではなかったのではないかと思う。北大工学部の建築工学科を卒業すると、ものすごく就職難の昭和 32 年にせっかく入った北海道庁の寒地建築研究所をすぐやめて、東京都へ再就職してしまった。首都整備局の日照権担当の課長（参事？）をしたり、高層ビルに清掃工場を入れるといった頭でっかちの構想の新宿の婦人会館プロジェクトの主担当課長をして都で数少ない高層建築の勉強をしたりして、美濃部知事の下では苦勞したようである。営繕部の建築 3・2・1 課長を順次勤め、最後に企画課長として高層建築の知識を買われたのであろうか、新宿の新都庁舎の計画の責任者となり、営繕部長として建設所長を兼ね、都庁舎を落成させて理事として退任した。官庁に勤める建築屋としては最高の仕事をさせてもらったと思う。北海道を離れ、兄貴から自立したのは大正解であったと思う。
- 話を昭和 16 年に戻す。 付属では 3 年生が 1 年生の教室を掃除することになっている。ある日、お前の弟がみんな帰った後教室で泣いているというので、二階の 3 年の部屋から下の一年単式の教室に降りていった。ウンコを漏らして、しょんぼり席のところ弟が一人いる。板の椅子に敷く 30 センチ角くらいの母の作った座布団もウンコ

まみれである。仕方が無いから、弟を連れて汚れた座布団をつまんで電車道をとぼとぼと家まで帰った。本当にくさかった。弟は心細く大変だったであろう。その後そんなことはない。

- 弟の担任は倉島繁先生という、付属で一番おっかない先生であった。ある日、母が授業参観に行ったら弟がこぶを出かしていたという。直前に何かおかしいことがあって、弟が大きな声で笑ったら拳骨をもらったらしい。倉島先生がなんとなくぼつが悪そうだったと母がいていた。ちなみに、母はずいぶんと授業参観に学校へきていたように思う。田舎から来た小生達がなじみこめるかどうか心配であったのだと思う。当の御本人達は平気である。
- 新たに決まった学校令で僕も国民学校 3 年生ということになる。担任は松本幸二先生である。前の年に師範学校から教生先生としてきたばかりの、新卒の張り切り先生であった。いささかきつい先生で、後にクラス会があって話が出てあまり懐かしがる人がいなかった。もっとも清水周子さん（日本で始めて心臓移植をした札幌医大・東京女子医大の和田教授夫人）は大変可愛がっていただいたというから、われわれはたぶん悪童であったのであろう。悪童にもスキーに連れて行っていただいた楽しい思い出もある。残念なことに、担任の終期に召集され、1 年たたずに戦病死してしまわれた。幸い薄き人生であった。厚いめがねの奥の何かをじっと見つめるようなまなざしが思い出される。山の子も少し都会になれ、調子にのっていたのかもしれないが、先生からもらった最期の通信簿に「皮相的なところがある」と書かれていた。父がかなり怒って、若い先生に何がわかるかというようなことを言ったことを覚えているが、もしかしたら松本先生だけが僕の欠点を見抜いていたのではないかと長じて思い、自省している。習字と音楽とが小生には苦手で、書初めは小生にとっては正月の 2 日にわたる苦しみの日である。母から OK が出たことがない。弟は字がうまくすぐできて遊びに行ってしまう。父は字がうまく、僕の進歩は始めからあきらめていたらしい。音楽も元気がよいと誉められたたことがあっても、うまいといわれたことはただの一度もない。いまだにカラオケが大嫌いな理由である。
- 東条内閣が成立し、国家総動員法が公布され、日ソ中立条約が調印され、陸軍が南部仏印に進駐し日本の南進が始まろうとしていた。南部仏印進駐を記念して、日本中の小学生にフランスと日本の国旗を押ししたゴムマリ（軟式庭球のボール）が一個ずつ配られた。ゴムは貴重品であり、インドシナへ押し入ってようやく手に入れた天然ゴムであり、それを子供にも知らせようとしたのだと思う。ずいぶん長らく三角ベースの野球などに大切に使って遊んだように思う。

昭和 16 年 12 月 8 日大東亜戦争始まる。後（敗戦後）に太平洋戦争と呼びかえられる。

- 運命の日が来た。付属国民学校は施設が整っており当時すでに校内放送のシステムが完備していた。「帝国陸海軍は西太平洋上で米英軍と戦闘状態に入れり」というラジオ

を聞いて登校した。その日は雪が深々と積もって、降り続いていた。早い雪が到来した年であった。ハワイ真珠湾に艦載機と特殊潜航艇による強襲をかけ米国太平洋艦隊の主力を壊滅させたという放送を学校で聴いた。陸軍部隊がマレー半島のコタバルに上陸しシンガポールを目指すといったことも伝わり、終日騒然たる思いであった。続いて10日に至り、マレー半島クアンタン沖でシンガポールから出撃してきた英国太平洋艦隊の主力プリンス・オブ・ウェールズとレパルスの2戦艦を航空部隊が撃沈したというニュースが入る。小生は軍艦ボーヤのあだ名をつけられるほど、子供にしては軍艦のことに詳しく、その日のニュースで出てきた米国・英国の主力艦の大きさ・主砲とその配置、艦形のシルエットなどはそらんじていた。特殊潜航艇が5隻なのに、戦死して軍神とされたのは岩佐中佐以下が9名なのはどうしてかなどと話したものである。酒巻中尉が捕虜第一号であったことなどは戦後まで知る由も無く、岩佐中佐だけ一人で行ったのではないかなどと有り得ないことを子供たちは想像していた。

- 「日米もし戦わば」などという少年倶楽部周辺の本を背伸びして読んでいたものである。話はそれるが、中学のときに英語のボキャブラリーの多くを英米の軍艦名から覚えた。フラワー級コルベットの名から花の名を、潜水艦の名から海の動物の名を、恐ろしげな形容詞を英空母の名から、アメリカの州名を戦艦の名から、都市の名を巡洋艦からといったわけである。
- この日を境に、ラジオも新聞も天気予報を流さなくなった。香港もすぐに陥落した。
- 子供の記憶は飛び飛びである。この年のいつかの時に家が幌西小学校のまへの南9条西16丁目から、南6条西13丁目の2戸建てに引っ越したのではないかと思っている。いつ越したのかを全く思い出せない。大東亜戦争が始まったときに南9条にいたのか南6条にいたのかを思い出せない。弟に聞いてみたが定かでない。開戦の日の教室の状況や、外の雪景色ははっきり覚えているのに、どこにそのとき住んでいたかがどうしても思い出せない。たぶん南6条にもう引っ越してきていたのだと思う。付属までは歩いて10分足らずの近間である。
- 大家さんが住んでいた南6条の二戸建ての家のひとつと、南9条の家を取り替えてほしいということで、住宅事情が困難になりつつあった矢先であり、やむを得ず承諾したらしい。学校が近くなり通学は大変楽になった。前の家との距離も15-20分の距離であり、大きな変化ではないが環境はずっと下町的になる。庭もほとんど無く、家としてははるかに質が低いことになる。戦時中ではやむを得ないことだった。敗戦を跨いで高等学校3年の昭和25年夏まで7年以上もすむことになる。戦後の住宅難の折にはこの家まで明け渡してほしいとの要求があり、その間にさまざまな大家さんとのいざこざがあり、裁判所への家賃供託まで含む争いがあった。
- 昭和17年1月マニラ占領、2月シンガポールの英軍降伏、3月ジャワのオランダ軍降伏、ビルマのラングーン占領、4月コロンボ空襲・英空母ハーミス撃沈、5月ビルマのマンダレー占領、フィリピンのコレヒドールの米軍降伏（マニラはとっくに陥落し

て米軍は湾口のコレヒドール要塞に立てこもっていた。降伏した米兵を徒歩で移送し多くを死なせたというバターン半島死の行進事件がおきたのはこの時である)と東南アジア一帯を瞬く間に攻略した。シナ戦線は硬直状態のままであった。

- 担任の松本先生が急に兵隊に行ってしまう、桜田正美先生が臨時に担任となられる。結局次の4年生一年間を桜田先生に担任していただくこととなる。音楽の先生で、みんなにとって担任の交代は夢のようなことであった。それだけに松本先生の急死はわれわれの心に大きく引きずるものを残してしまった。

昭和17年4月国民学校4年生になる

- 4月4年生になる。同級生の秋山君のお父さんが占領直後のマニラへ(多分軍の仕事で?)行ってきて、お土産に鉛筆を頂いた。今の三菱ユニのようなすばらしいもので、負けたマニラにこんなものがとびつくりしたのを思い出す。今になってみれば、彼私の実力差であろうが、日本の鉛筆はもう白木でがさがさと引っかかるような芯のものになっていて、3年前の1年生のお正月に実吉先生から三越で頂いた様な良いものはまったく手に入らなくなっていた。
- 父に連れられて新琴似国民学校まで歩く。北大の北端の北18条が市電の終点であり、昔の札幌市街はそこで終わる。その北は札幌飛行場であり、その東側の一本道を1里ほど北に向かって歩くと、帝国製麻の麻畑にぶつかる。そこに戦後に札幌で最初の麻生団地が創られた。この辺を、往時の麻畑にちなんで麻生町という。その先に新琴似駅がある。当時は札沼線といったが今は学園都市線といい、麻生まで地下鉄の南北線が延びている。帝国製麻の筋向いに墓地があり、左折して1キロほど西に行くと新琴似神社と新琴似国民学校がある。現在の屯田の我が家はそこからさらに北に1kmほど行ったところにある。学校で遊び、夕方列車で帰る。札幌駅の近くの丸善で、よく歩いた褒美に「大東亜共栄圏の植物」東京帝大教授本多静六著(丸善少年文庫)?を買ってもらう。南洋の森は、太陽光が大変に強いので、喬木、普通の樹と灌木の3段の木から森が構成されていることが書いてあった。今日のようにTVがふんだんに自然の番組を流すことの無い時代のことである。本の紙はずいぶん悪くなり、写真もあまりはっきりしたものでなかった。後に、1970年代の初めにOTCA(Overseas Technology Transfer Corporation)のコロンボプランの専門家として、引き続きOTCAが改組されて新しく出来たJICAの専門家として、3年にわたりインドネシアの水道技術者の教育にジャカルタに働いた折に、熱帯の森を実際に見ることになる。知識を得てから30年あとにその読書は裏づけを得ることになる。
- ちなみに、第二次大戦のヨーロッパ戦線を描いたTVシリーズのコンバットのビッグモロウ扮するサンダース軍曹やヘンリー少尉が進むフランスやドイツの丘陵地帯の森は灌木もまばらで、彼らは下草を踏みしだいてどんどん進んでいく。ヨーロッパは緯度が高く林の樹幹で日が遮られると、地面に光が十分に届かず灌木も生えない。下草

だけである。熱帯のジャングルと対比的な林である。林の中は薄暗く、ASA100のフィルムなら、F2.8で1/10secくらいの長い露出がある。赤頭巾ちゃんがおばあさんを尋ねて森の中を歩いていけたのは、灌木の無いヨーロッパの森であるから出来たと思う。狼の出る暗い森の中におばあさんが一人だけで住んでいたのは、この時代このあたりで「姥捨て」があったことを示しているのではないかともいう。

- 我々の頃には、学校に小使さん（後に用務員などというなじみの無い名前になってしまうが）のおじさんが必ずいた。付属の中庭の藤棚のある前に、小使室（100m²くらい）が宿直室の廊下をへて半島のように校舎から突き出ている、土間には直径が1メートル以上もある大きな鉄釜が2つ炉の上にかかっており、お湯がいつもぐらぐらと煮立っていた。掃除やその他にお湯のいるときは、小使のおじさんが柄杓（ひしゃく）でバケツや大きな薬缶に湯を注いでくれて、しっかり持っていきなさい「やけどをするんでないよ」と注意してくれたものである。
- 冬の朝は、子供や先生たちが来る前に全部の教室の直径70cmもあるストーブに火を入れ、石炭箱に石炭を満たしておく。学校に幾つストーブがあったのであろうか大変な仕事である。付属には2人の小使さんがいたこともあったが、記憶にあるのは終始「カメレオン」おじさんである。体に若干の障害があったのか兵隊に行くことがなく、ずっと我々の面倒を見てくれた。とっておきおっかなくて、いたずらや悪いことをすると、ひどく怒られたものである。学校にいくといつもおじさんがいるので（小使室に住んでいたのかもしれない）、子供たちは休みの日も、早朝も、夕方遅くも安心して学校で遊んでいたものである。落し物なども小使室で預かっておいてあったように思う。ちなみに、放課後火を落としたストーブの石炭殻は大きなガンガン（鉄の入れ物）に取り出しておく。高学年は自分たちで炭殻捨て場に持っていくが、あとは小使さんの仕事である。
- 3年以上の学年は、自分の教室とともに1-2年生の教室等の掃除をする。ある日、弟のいる単式一年の教室の掃除当番の日があった。クラスで一番いたずらの激しい田島君と一緒に組であった。炭殻集めに小使さんが天秤棒にガンガンを吊って教室に来た。田島君が教室の後ろに貼ってある「あいうえお・・・」表を指差し、指したところを大きな声で読めという。「カ」「メ」「レ」・・・となり、おじさんが怒って天秤棒で田島君を廊下に追っかけていった。田島君は高校を出てから絵を描くようになり、彼が描いた北大構内の油絵を、小生は北大の総長室にかけておいた。今も、放送大学の学長室の机の後ろにクラーク先生の牛小屋（重要文化財）を描いた彼の絵をかけてある。ここしばらく彼に会わない。
- 4年生の冬のある日、中谷宇吉郎先生が付属の高学年の子供たちにお話をしてくださることになった。4年生以上である。大きな真っ黒な幻灯機を音楽教室の真ん中にすえてガラス乾板の写真を用いて、雪の結晶のお話である。中谷先生のお嬢さんが僕の一年上と下にそれぞれいて、息子さんが弟と同じクラスで仲良しの友達であった。彼は

子供のとき白血病(?)で夭折してしまった。父兄会の小父さんとして大先生からご自身で当時最先端の雪の結晶のお話を聞かせていただいたことになる。学士院恩賜賞をもらわれて間もなくではなかったのだろうか。「筒の中に垂直についた動物の毛に、下から送り込まれてくる湿り空気中の水蒸気が結晶を作る」実験装置とその過程を子供でもわかるようにはっきりと説明していただいたことをずうっと忘れなかった。「雪は天からの手紙である」という有名な中谷先生の言葉は後年知ったが、その元の話先生からじかに聞いたことは幸いなことであった。ただしそのときに使った動物の毛をずっと馬の尻尾の毛だと思っていた。北大総長の時代だと思うが、中谷先生の最後の直弟子とも言うべき樋口先生(名古屋大学名誉教授、元名古屋大学水圏研究所長)に思い出を話したら、「それは違う、ウサギのお腹の毛だよ」「馬の尻尾のような太いものにあんな繊細な結晶はできないよ」と笑われてしまい、やや半世紀ぶりに誤りを正してもらった。あまつさえ、その話を新聞か何かに披露されてしまった。この実験装置のコピーは北大博物館に展示されている。

- 樋口先生は中谷先生を慕って旧制三高から北大に来た方であり、お互いが講師の時代レーン先生という北大予科以来の外人教師の先生のところで、リーダーズダイジェストの英語版で週一度英語を勉強した仲間である。レーン先生は戦争が始まってすぐスパイ容疑で苦勞され、戦時中はアメリカに送還されていた。レーンご夫妻の末の双子のジニーとキャサリンは付属の2年上級で、付属小学校の短距離の記録を総なめに持っていた。運動会では本当に速かった。数年前にはじめて、久保起さん(元建設省下水道部長、ストックホルム水賞受賞者、北大土木工学科・札幌一中の先輩)が学生時代、特高警察と話をして一連の方々の支援をされたとのことを知った。
- この頃になるともう食べ物もそう潤沢でなくなり始めていた。学校でパンの切符をもらって近くのお店で買い求めるようになっていた。秋の頃か、桜田先生が一枚切符が余ったと小生に下さった。南1条の電車通りを東に三越のほうに2町ほど行くと、パン屋がありコッペパンをひとつ買うことが出来た。我々飢え世代は食い物の思い出が突出して鮮明である。そのもう少し先に行くと西9丁目のあたりに三吉神社がある。札幌神社の大祭は6月15日であるが、三吉さんのお祭りは一月早い5月15日である。ようやく桜が散って、山の雪が消える頃である。札幌神社のお祭りは初夏の始まりであり、制服が夏に変わる。三吉神社には国民学校6年生のとき毎日朝1キロほどを駆けてお参りし、「札幌第一中学に合格するように勉強をいたします、怠けないようにお励ましてください」と手を合わせた。合格させてくださいなどと虫のよいお願いはしなかったつもりであるが、考えてみれば同じようなものである。今もって三吉さんには頭があがらず、お正月や札幌へ行った折にはお参りして御礼を申し上げている。三吉神社のまえに三浦靴店があり、大学時代になって弟ともども、何足も皮の登山靴やスキー靴を作ってもらった。既製品の山靴がああの時代にはなかった。僕の靴の木型はどうなったのであろうか。最後の登山靴とスキー靴は教授になってから作ってもら

ったが、その後あまり山へ行かなくなって、あまり使わぬまま札幌の家の車庫の屋根裏に転がっている。

- 秋に上埜くんの小父さんに連れられて康夫君と3人で、豊平川の支流真駒内川にあったサケマス孵化場を見に行った。卵（イクラ）をお腹に提灯のようにぶら下げた稚魚が水槽の中を泳ぎまわっている光景は長じても忘れられない。昭和15年位の事だったように思う。豊平川は敗戦によって上流の真駒内に米軍がキャンプ・クロフォードを作り、水洗便所の水を処理もせずには放り出したことによって、BODが20ppmにも達する汚濁河川となって、サケマス孵化も廃止となり、1972年札幌冬季オリンピックのために下水道が整備されるまでは、遊泳禁止の死んだ川であった。今は豊平川本流のもう少し上流に「鮭の科学館」が出来て、子供たちはいつでも、鮭の卵が孵化するのを見られるし、秋には海から帰ってきた鮭が上流に向かって床止めを飛び越えていく光景が見られる。子供たちが人工孵化した沢山の稚魚を春には豊平川に放す。3-4年経つと帰ってくる。札幌市内に何箇所も自然産卵床があり、湧き出す伏流水のある砂れき床で自然孵化が行われているという。札幌へ帰ったらじっくり見たいと思っている。
- 今になって思い返してみると、国民学校4年生になっての大きなことは足立民治君と終生の交わりを持つようになったことであろうかと思う。同じクラスの仲間であったが、4年になって初めて隣り合わせの席に並ぶことになり、急に親交が深まったと思う。彼の家は大通東8丁目の、大通モールが東に進み豊平川に当たって終わるところにあった。ほぼ1丁角の大きな敷地のなかに、彼の家や、使用人の家や、彼の叔母さん（小父さんの妹さん）が嫁いだ北大工学部土木工学科の古藤猛也名誉教授のお宅などが並んでいた。家の裏手は豊平川の堤防に面し、いつでも縁側から広い芝生とつつじの灌木林の間を抜けて泳ぎに行ったものである。家内と初めて会ったのも彼の家であり、幾つものことを足立君のご両親から、その立ち居振る舞いを通じて教えていただいた。小父さんは付属小学校と札幌1中の超大先輩であり、仙台の旧制第二高等学校を経て帝国大学を明治の末期に卒業された方である。足立君は小父さんの親戚からの養子であり、小父さんの年はその頃すでに60歳前後ではなかったかと思う。一度も人に使われたことが無いと笑っていられた。札幌電燈会社を起こした方であると聞いた。「この間の大火」というのが明治の話で、びっくりした記憶がある。小母さんは敦賀の旧家の方で、奈良の女子高等師範のご出身と伺った。明治末年の北海道では珍しいハイブローのご夫妻である。足立家の歴史は開拓使に始まるらしく、小父さんは庸三といわれたが、足立君の民治という名は歴代の名であるらしかった。
- 付属の子供の親で一番多いのが大学等の先生や医者であったような気がする。北大の学長を8年も勤めた杉野目先生（理学部有機化学）と大学紛争のときの学長堀内先生（理学部触媒化学）の両先生の一家は共に多くの子供さんがみな付属にいて、同級の杉野目君も堀内さんも5番目くらいの子供でなかったかと思う。彼は後年室蘭工大の

教授になり、堀内さんは東大で女子ボート部を創設して堀内ボート一家を継ぎ、小生の留学したフロリダにご夫君とすぐ後にやってきて小生のフィルム乱費のウィットネスとなり、クラス会のおり冷やかされた。正宗君、中川君、小川君のお父さんは北大医学部の内科や婦人科の教授であり、佐久間君のお父さんは札幌女子医専の小児科の教授であった。正宗君のお父さんは後に東北大に転じ、彼も東北の医学部を出て秋田大の教授・医学部長となる。中川君はおそらくわがクラスでは一番安定したトップで北大医学部を出て教授となる。女子の福富さん、佐山さん、高桑さんのお父さんは工学部の教授であり後に教えを受けることになる。府瀬川君のお父さんは我が付属の親学校札幌師範学校の校長先生で、新年、紀元節、天長節、明治節の4大節には本校の師範学校へ行って、御真影に礼をし、勅語の奉読と講話を聴くことになる。子供の頃から、大学の雰囲気にはしばしば触れることがあり、これらの友達や近いクラスの友人のお父さんの研究室にも遊びに行ったりして、北大のキャンパスは子供の頃から身近なものであった。数学の河口先生、物理の中谷先生と茅先生（後の東大総長）、後に北大の学長代理をしばらく務めた工学部の阿部先生のご子息も付属の一緒の仲間である。親友赤岩君（群馬大学長）の先生の理学部教授太秦先生の息子さんは弟の仲間で、先生は男爵であった。後年、北海道大学の15代目の総長に凶らずも選ばれた山の子の小生が何とか責めを果たせたのは、このような子供時代の仲間との交友が支えになっていたように思う。北大の構内で遊んで、札幌で大人になり、北大の総長を務めたのは小生が始めてのようである。北大の一木一草に少年時代からの思いがある。杉野目先生は大学を卒業するときも、学位を頂くときも学長であり、学長室で学位記を頂いた後、小さな声で「君よかったね」といっていただいた。

- この年にはやくも日本の太平洋での進出は限界となり、17年4月18日に優勢な日本に一矢を報いんと、ドウリットルがロッキードB24を空母から無理やり発進させて、東京・名古屋・大阪に散発的でも本土初爆撃を加え、片道飛行で日本軍に占領されていない中国の基地に逃げこもうという特攻的な首都空襲が行われた。そのような米海軍の挑発をたたこうとして、昭和17年6月にはミッドウェイで連合艦隊が機動部隊の空母勢力が全滅に瀕するような、劣勢のアメリカ海軍に決定的な敗北を喫し、わずか半年でアメリカの反攻が始まる。真珠湾を強襲した機動部隊の南雲中将の責任を言う声もある。真珠湾に第二波攻撃をかけず、米空母群と地上の貯油・発電施設などをそのままにしておいたとか、ミッドウェイの油断ともいえる接近・索敵の仕方などが問われているようである。最後はサイパン島で艦と飛行機のなくなった航空艦隊が地上戦を戦い玉砕消滅してしまい、南雲中将も自決されたようである。ソロモン海戦、珊瑚海会戦、ガダルカナル撤退などがあり戦いは互角から敗勢に転じつつあり、食料・生活物資はだんだんに乏しくなっていたが、まだ敗北を子供たちまでが感ずることは無かった。
- 冬に桜田先生のご指導で、今の中島公園のところにあったJOIKで劇を放送するこ

とになった。この間なくなってしまったがよき友人だった中西章一君や佐久間俊直君は長いせりふのある、いわば主役である。小生は、00君遊ぼうとか何とか短いせりふを何回かだけ言う、まさに端役である。それでも帰りには、同じノートと鉛筆を出演料に頂いた。すまないことである。いまNHK北海道になっているのが当時のJOIKである。

昭和18年4月国民学校5年生になる

- 5年生になると、単式複式の制度が男子組と女子組に別れ、一学年の人員が1.5クラスが2クラスに増える。男子・女子組が共に40名編成であった。クラスに10人ぐらいの編入生が来ることになる。誰がこのときに加わったのか定かに覚えてはいない。5年生になると三角帽子のぼんぼりは白に変わる。今は、1年生から白だという。
- 我々5年男子組の担任は、伊藤茂先生で帯広から転勤してこられた。女子組の担任は西村光世先生である。付属の子供たちは若干他の学校と違う特性を持っていたらしく、伊藤先生が後年、「こましゃくれていて少々生意気であると初め思った」と我々に語ったことがある。そのようなこともあってか、ずいぶん厳しく鍛えられたような気がする。4年の担任の桜田先生に一年楽しくすごさせていただいた後だけに、みんな少々応える毎日が始まる。戦時の風潮もあったのかもしれない。我々のクラスは、先生に殴られるというようなことを経験したことが無かったので、この年からの思い出は後年に至っても明るいものではない。幾多の校長をへて功なり名遂げた先生であるから、時代の空気が大きかったのかと思う。いつも難しい顔をしている先生であったので、われわれ悪童は「渋柿」先生という綽名をつけてしまった。
- 戦争が激しくなり、もうだんだん食べ物が窮屈になり始めていた。クラスに八反田篤君という友達がいる、彼のお父さんは三井生命の札幌支店長さんであったかと思う。オフィスが札幌駅前の今の全日空のところにあり、当時は少なかったコンクリート建物で、彼の家は事務所の3階にあって、職住一緒であったと思う。弟同士も付属の2年下で同級であった。札幌駅前であり、火事で燃えてしまった札幌鉄道局が電車道を隔てて、今の丸百貨店の前に聳え立っていた。古い札幌駅も、1/3模型が北海道開拓村にあるが、本物はなかなかの偉容の有る建物であった。しばしば彼の家の窓から、札幌駅前を俯瞰した思い出が強く残っている。彼の誕生日に、彼の小父さんが仲の良い友達数人を三井クラブに招いてくれた。三井クラブは今の知事公邸で、三井財閥の迎賓館であった。戦時中に本当の料理といえるものを頂いた最後で、ほかのところはもう難しくなっていたように思う。
- 北大の駆け出しの教授の時代、先輩の堂垣内知事に呼ばれ、人口の札幌一極集中をとどめる方法とか、水資源の有効利用などについて3-4人の仲間とご馳走になりながらいろいろの話をさせていただいたのが、知事公邸になってからの三井クラブ再訪である。「明治のように4県に分割すれば」などと話が進んだが、知事からそんなことを

言うわけには行かないよ、という話にもなった。道州制で北海道が先駆けて州になると言うならば、支庁を止めて県並みの権限に大きく分割して、道が州としてそれらを束ね国の権限を引き取ることでなければならぬだろうと思う。今の道は、図体はでっかいが、ただの県のようなものである。開発庁を超えた国の権限の導入と札幌外の地方への思い切った権限の分散とその為の能力開発がともにいるのでないかと思う。堂垣内先輩と話したのもそのようなことであったが、その頃は国が権限を譲るというような空気ではなかった。北大の総長を終え、放送大学長として東京に赴任する直前、後任の中村睦男総長と堀知事に夕食に招待されて教育長を加えて四方山談義をしたのが、訪問の最後である。杉野目学長の時代、三井クラブを北大が譲り受け、北大農場を長沼のほうに移すというような話があったと仄聞いたことが有る。植物園との連結や大学の新施設の展開で都心の公共性が高度化し、札幌という街と北大のその後の展開もまた違っていたかもしれない。

- 理科の授業のことでいくつかの思い出が有る。5年生の時に自転車の分解組み立てをしてその機構を知るといふ勉強をすることになった。女子組みの西村先生が、男女両組を集めて、小使室の横の中庭で始めることになり、女子組の石田さん(?)の自転車を借りて授業が進んだ。良いお天気の日であった。ところが、なかなかもとの形に組み上がらず、彼女が泣き出す羽目になってしまった。その後自力でうまくいったのか、誰かに応援してもらって授業が完成したのか記憶が定かでない。今のように自転車を乗り捨てたり、人のものを勝手にもって行ったりする輩が少なからずいる時代ではなくて、自転車は一軒に一台の貴重品であり、パンクすればチューブが継接ぎ(つぎはぎ)だらけに成るまで直して使うといった時代のことである。また、これは6年生になってのことだったかもしれないが、クラスの議論で「水は電気を通すかどうか」といったことが放課後に始まって決着がつかず、担任の伊藤先生まで引っ張り出して喧喧諤諤となった。電池の実験で、「硫酸銅溶液なら電気を通して豆電球がつくが、ただの水では点かない」から、水は電気を通さないと一派はいう。もう一派は「ぬれた手でコンセントに触るとびりびりとくる」「乾いた手ではこない」だから水は電気を流す。先生もわからない。小学校の理科は、まだ0か1(白か黒)かであり、すべてはその間にさまざまな形で分布していることを当時の小学校理科教育では教えていなかったのだと思う。わからなかったことがわかったことによって、その後長じていろいろと勉強が進み、新しい成長を自分で実感し得たのかと思う。中谷宇吉郎先生から聞いた最先端の話と、水の電気伝導率を知らないで水が電気を通すかどうかを0・1問題で論ずる幼さ。物事はいつか判ることがあっても、判らないことの方がほとんど言うことを、その後もいやというほど知ることになる。水の結晶の写真をとって、「良い水か良くない水かがわかる」(美しい結晶は良い水からできる*そのほんたいは・・・?)というような本が出ている。趣味でやる分にはかまわないと思うが、「水にやさしい言葉をかけてやるときれいな結晶ができる」という話にまでエスカレート

するとこれはもう大変である。こんなことをある学校の自由学習の時間にやっているという話が出て、水の構造を専門にしている学者たちの会合でひどいことですねという同意になった。中谷先生の「雪は天からの手紙である」という、雪の結晶の話と似て非なるものであり、世に有る妄説は限定された科学の理解よりもはなはだしく多く、それにつながる人も商売（虚業）から趣味まで数限りなくある。

- 昭和18年は子供の目にも太平洋の戦局が怪しくなってきたことが見え始めた年である。ミッドウェーの大敗、ニューギニア・ブナでの全滅はほとんど報じられることがなかったが、春すぐのガダルカナルからの転進（当時の表現）と山本五十六連合艦隊司令長官のソロモンでの戦死（6月国葬）、5月末アリューシャン列島のアッツ島での山崎大佐以下の玉砕（全滅）とそのすぐ先のキスカ島からの撤退（これは本当の僥倖である）などが次々に公表される。ガダルカナルで壊滅した市来支隊、アッツの山崎部隊はいずれも北海道の師団である。アッツの玉砕が太平洋島嶼における日本軍の全滅の最初であった。夏に札幌で大々的に慰霊凱旋の行進が行われた。薄野の中央寺から始まったと思うが、僕は薄野にいたる道で拝んだ。全戦死者一人一人の15cm角位の遺骨箱（骨があるわけがないから、残していった何かが入っていたのであろうか）を白布に包んだものを、月寒25連隊の兵士一人ずつが首から胸にかけ、兵士が担ぐ銃も白布で包まれて、全戦死者の数2600余人だけ延々と続く。あまりの数の多さに声もない。月寒の連隊まで行進は続いたのだろうか。この時だけしかこのような公開の慰霊行進はなかった。国葬も山本五十六大将の時の盛大さが最後であり、日本は最早このような儀礼を尽くす余力もなくなってくる。ガダルカナルは転進（大本営発表の用語）であり、その内容は漏らされない。12月になると文系の学徒動員が始まる。理系も短縮卒業が始まり、12月にはマキン・タラワが両島共玉砕する。米軍の内南洋への反攻が本格化し始める。台湾にも徴兵制が実施される。ヨーロッパではレーニングラードで独軍が降伏し、ムソリニーが失脚し、イタリアのバドリオ政権が降伏後にドイツに逆に宣戦布告するなど、連合軍の優勢が確定し、われわれは、明らかに負け始めたのである。
- この年の春、父が新琴似国民学校の教頭となり、後に北海道庁の職業訓練学校の主事に転じる。現在も手稲にある職業訓練大学校の前身である。食糧事情は次第に厳しくなり、家でも畑を借りて芋を作ったり、収穫の時には母が新琴似に手伝いに行ったりして、食料の確保に努めた。それでもまだ、配給が滞ることはあまりなかったが、衣類は新しく買えなくなり、育ち盛りの子供、とりわけ小中学校の子供を持つ親は大変である。衣料は配給制度となり、衣料切符が発行され、それを持っていかなければ買うことができない。切符を持っていてもいつでも買えるわけではない。品物が入ると、学校や隣組でしかるべき指示があり、指定の店で指定のものが買える。今の日本のように、あらゆるものが有り余っている時代でなく、一人一人の持っている衣類の数は限られたものであるから、2年も補充がないと大変である。大人はまだ良いが、

子供は寸法がすぐ変わるし、衣料の質が良くない（毛織物や木綿はなくなってしまって、ステーブル・ファイバー通称スフという初期の人工繊維）人絹が多くなる。親の物を作り直して（今いうところのリフォームであるが、そんな余裕のある状況とは違う）着ることのできる場合は別として、配給の制服はすぐに膝に穴があき、クラスみんな継ぎのあたった服を着るのが次第に普通になってくる。

- それでもまだ空襲が本土を襲うことはほとんどなく、子供たちは日常の暮らしをあまり貧しいとも思わずにしていたとおもう。凧揚げをしたり、ゴム動力の模型飛行機を作ったりするのが男の子の遊びである。今ならプラモデルというところであるが、当時は木っ端を粗く切ったものをナイフで少しずつ切り込んで、10cmくらいの模型飛行機や30cmくらいの戦艦や航空母艦などを作ったものである。ちゃんとした模型ができるまでには10日以上もかかる。部品をくっつける糊は、米粒をつぶして捏ねた「そっくい」か、本格的には膠を二重（湯）鍋で煮て作る。サンドペーパーで磨いたものに砥粉を塗って目止めをし、水彩絵具で色付けし、透明ラッカーをかけると出来上がりである。北海道少年展といったようなものに出品せよとの先生のお話で、中川光二君と二人で30cmほどの戦艦長門（らしきもの）を作って出品した。豊平館が会場であったと思う。佳作をもらった。中川君に軍艦を作る趣味はなく、付き合わされて迷惑であったと思う。クラスで模型づくりが一番うまかったのは、篠原君であろう。彼は後に中川君と一緒に北大の医学部に進み、精神科の医者になる。彼の作ったA1プレーン（竹ひごと紙張りの翼を持つ一本角材の胴体を持つ、当時の一番初歩の標準型模型飛行機で、同年代の男の子ならほとんど一度は作ったことが有ると思う）は屋内運動場の梁のあたりまで揚がって、ゴム動力が切れても悠々と滑空していた。われわれの作ったA1との差のあまりの違いにあれよあれよと見守るのみであった。小さな大砲や戦車の模型作りも大変に上手であった。竹を切って作った十字凧は、僕のようなへたくそが造った物でも長い尻尾を垂らしゆうゆうと空に上がり、50m以上の凧糸の限界まで揚がって一時間も泳ぎつづけていた。飛行機はいくつも作ったがだめだった。
- 菓子折りの木っ端で数センチから十数センチの大きさの姉妹艦を数隻ずつで作って、姉妹艦で構成される戦隊（駆逐隊などの原則）を単位に艦隊ごっこをして遊んでいた。単艦の模型でなく、艦隊のシステムオペレーションに熱中したと言えば、聞こえはいいが、要はごみのような模型を戦隊単位で並べて戦術・時には部屋を3つも使って戦略ごっこに耽っていた。単艦同士の打ち合いなどは、イギリスのヒーローで、わが鞍馬天狗に比すべきホンブローアーの物語や、植民地海軍のジョンポールジョンズが活躍した時代の仏・米の私略船以後はあまり興味がない。18世紀になれば、フリート（艦隊）どうしの戦いの時代であり、僕の遊びも艦隊ごっこであった。
- 戦争はだんだん難しい局面に入りつつあったが、身近の生活も隣組を機軸として、防空演習や配給物の分配など様々なことが以前とは違ってくる。南6条西133丁目のご

近所を思い出してみる。家は東向きの2戸建の南側である。お隣の(左側)は上野さんという国鉄に勤めていた方である。そのまた左が細い小路を経て吉田さんで隣組の組長さんで一年あとの修ちゃん(大通小学校)がいた。小路の奥の裏手に一軒おいて砂金さんのおうちがある。砂金さんの小父さんは、シン之助(?)という名前の北海中学の剣道の先生で、北海道一番の高段者で当時7段であったかと思う。後に錬師とか言うものになられたと思うが知識があやふやである。一番のお兄さんは北大の機械工学科をでて江別の王子製紙にいたとおもう。僕の仲間は、3-4年うえて北海中学に行っていた六ちゃんである。おとなしい人で、後に札幌駅に勤めてよく会う事があった。右隣の家の一軒に斉藤さんがいた。子沢山のうちであったが大変な才媛のお姉さんや腕白仲間の少し年下の男の子たちがいた。その一人の節ちゃんから、小生が北大の総長になったとき「やったぜ、ノンちゃん」という祝電をもらった。腕白遊びをした時から50年もたつての事である。本当にうれしかったが、彼の住所も正確な名前も覚えていなくてお礼の仕様がなかった。左前のお向かいに後藤さん、右前のお向かいに苗字を覚えていないが、北大予科のお兄さんがいた。戦後北大法文学部創設の折に鉛筆を売っての募金を一生懸命していた事を思い出す。結核に感染したとか言って療養していたようにも思う。厳しい時代であった。右の斜め向かいの和田さんのおばさんにも良くお世話になった。

- さらに、左手(北)のほうにもう一本の小路を渡ると、近藤さんのうちがある長女の幸子さん(サッチャン)は付属小学校単式一年からの同級生で、後に男女共学を占領軍に強制されて、札幌の公立4高等学校が再編成されて札幌東高等学校に10ヶ月暮らしたおり、高校最後の3年6組でまた一緒になり、我々の先輩の工学部の電気(電子工学)の鈴木先生と結婚して、ずうっと今に至るまでのご厚誼をいただいている。小生よりほとんど1年先の四月生まれの姉さんで、頭が上がらない。弟の浩君はこれまた弟の睦敬と付属の同級でずっと長い付き合いである。整形外科のお医者である。下にもう一人トオルちゃんという弟さんが居た。近藤さんの小父さんと父が同じ石川県人という事もあって、家族ぐるみのお付き合いをいただいた。北海道庁に勤めていて、いろいろと気を配っていただいた。すばらしいサクランボの樹があつて、初夏には小母さんにたくさんいただいたものである。母が不在の時など、いつも近藤さんのおうちで遊ばせていただいたものである。ポプラの木から落ちて気絶したときも母が不在で、近藤さんの小母さんに介抱していただいて事なきを得た。
- 小学校も高学年になり、中学、高等学校と社会性が出てきて、行動範囲も知人・友人の範囲も広くなり、南9条16丁目にいた低学年の3年間に比べればはるかに長くない南6条の隣近所の方との思い出は相対的に希薄である。防空演習や灯火管制が始まったのもこのころであったと思う。まだ、お弁当を持って学校へ行ける状況であった。いつからかは覚えていないが、頭はみんな坊主ガリであった。幸いにも弟はすっかり健康になり一台の自転車に2人乗りをして、足立君の家や、上埜君の越した時計台近

くの病院（耳鼻咽喉科を小父さんが開業した）の家に遊びに行ったものである。弟は河口君（お父さんは理学部の河口空間で有名な数学の教授で、彼は後に日大教授、彼のお兄さんは北大工学部で小生と同僚）や中谷君（宇吉郎先生の一人息子で夭折）、近藤裕ちゃんなどと遊んでいたらしい。

- 2月に内南洋のマーシャル群島に米軍が侵攻し、2月クエゼリン、ルオットの両島が玉砕する。内南洋が米軍の手に落ち始める。戦前の「日米もし戦えば」のストーリーでは、島を経てる間に米海軍の勢力を潜水艦と島嶼にある基地航空隊が漸減させて、日本近海の大海戦で勝利を得るという話であった。日露戦争の日本海海戦の完勝（世界海戦史の上で対馬沖の日本海海戦ほどの艦隊決戦における一方的な完全勝利はない。その5月27日は海軍記念日である）の夢から覚めずに、戦艦大和・武蔵を作って待ち構えることを考えたわけである。日本の潜水艦イ号はドイツのUボートに比べるとはるかに大型で、太平洋上を侵攻してくる米戦艦を一隻また一隻と漸減させる目的で作られていて、米・独のように商船を狙うことを目的としていなかった。次々と内南洋の不沈空母になる島が全滅しつづけていくのは逆シナリオであり、サイパン、テニアン玉砕、マリアナ海戦の完敗と、日米戦の仮説とはまったく違う展開を見せ始めていた。次の昭和19年、20年になると硫黄島の失落を経て、本土がB29に連日襲われ、沖縄が激闘の末米軍の手に落ち、決戦兵器の大和が瀬戸内で徒死するのを嫌い特攻を果たすべく九州南海上で沖縄に殉じて最後を迎えた。大艦巨砲主義にまみれた日本海海戦大勝の過去の夢の果てである。ジェットランド沖の英独海戦後に艦隊保全主義(fleet in being)を採った第一時大戦のドイツ海軍は艦隊をほとんど残したままで降伏し、全艦隊が捕獲され、英軍港スカパフローへ移送され、そして最後に自沈といった経過をとる。降伏を潔しとしなかったともいえるが、第一次大戦末期のカイゼルのドイツ大海艦隊と違って、敗戦時の日本海軍にはまともに戦える艦がなく、大和が単艦に近い形で小数の駆逐隊を随伴するのみで、航空援護さえない片道燃料で出撃して、日本海軍の最後の幕を引いた。当時の僕らには、戦艦大和・武蔵の存在など知らず、ましてレイテ沖の武蔵の最後、大和の特攻出撃と玉砕など知る由もなかった。第3の大和型戦艦が空母信濃となり回航中に紀伊半島沖で何事もせぬうちに米潜水艦の餌食になったなど知る由もない
- 正月に野付牛（今の北見）の塚本兵助伯父さんが来て数年ぶりで北見へ連れて行ってもらった。塚本は母の長姉の嫁ぎ先で、酒屋でその他の雑貨も売っていた。（旧制）野付牛中学（今の北見北斗高校の前身）3年の従兄弟の昌実ちゃんが末っ子で、遊び相手であった。彼は後に中学4年から盛岡の高等農林専門学校（今の岩手大学農学部）に飛び級入学した。この冬の列車が座席に座って旅が出来た最後である。札幌と野付牛（北見）は9時間か10時間かかっていたように思う。夜8時頃乗って到着くという夜行列車で、石北峠を機関車2両連結の重連で人の歩くような速さでゆっくりと登っていく。戦後、夏にはこの列車に乗って、母方の伯父、伯母に大変にお世話になり

夏を過ごさせてもらったものである。夏には石北峠で夜が明ける。霧の中に響く蒸気機関車の峠を登る喘ぎにも似た音と、薄闇が次第にあけていく針葉樹林の夜明けを今なお思い出す。この昭和19年の正月は、味付け海苔を食べた最後である。焼き海苔の好きな小生のために、伯母さんが店に残っていた10ほどの小さな海苔束をガラスの容器を空にして引き上げてくれたからである。駄菓子屋に今でも見られる、ブリキの丸いふたをした20センチ位のひし形のガラス容器がその頃のどこの店先にもあった。野付牛の冬の厳しい寒さを始めて味わった。今も北見工業大学の運営審議会の委員として冬の北見をしばしば訪れる。今でも寒い。東京から飛行機で1時間半、札幌からなら列車で4時間弱の便利さになり、石北峠もトンネルであつという間である。

昭和19年（1944年）国民学校6年生になる

- 戦場が急速に日本本土に近づいてくる。一月マーシャル群島が取られたのに続いて、6月にはついに内南洋の中心マリアナ群島のサイパン島に上陸し7月には守備隊全滅。続いてテニアンも落ちる。サイパンは南洋庁のある日本の内南洋統治の中心である。マリアナ沖海戦で日本海軍は航空艦隊（機動部隊）の全戦力を失う。米機動部隊が10月には沖縄を襲い、台湾沖航空戦がある。10月米軍フィリッピン・レイテ島に上陸。マッカーサーの「We shall return」成就。インパール作戦でビルマ方面軍大敗。17歳以上（従来20歳）が兵役義務を課される。10月24日レイテ沖の海戦で連合艦隊主力を失い、日本海軍は戦略能力を失ったと考えても良い状態になる。多数の艦載機に群がられては、ワシントン・ロンドン条約形の艦艇はほとんど対抗できないことが最終的に証明されたと考えてよいであろう。ハワイ・マレー沖海戦で日本海軍が実証し始めた航空機優位時代の全証明が終わったともいえる。
- 初めて、神風特攻隊がレイテ沖で米艦に爆弾を抱いて突入する。航空特攻が昭和19年10月25日から敗戦の20年8月15日まで10ヶ月近く続き、小生と数歳少し上の多くの先輩たちが突っ込んでいった。11月になるとサイパン・テニアンを基地としたB29が東京を空襲（11月24日初めての空襲）し始め、10ヶ月に亘る本土の戦略爆撃が始まる。8月沖縄から本土への学童疎開船の対馬丸が撃沈される。昭和19年8月には国民みんなが武装するというこで、鉄兜・防空頭巾、女性はモンペ・ズボンで竹槍訓練、防火演習がいつも行われるようになった。隣組がその単位であり、ラジオから流れる「トントン・トンカラリット隣組」がポピュラーソングであった。この時期の隣組の負の体験が、戦後に都会人の集団規制の嫌悪の情を加速し、現代の近隣社会の崩壊にまで続く事となる。昭和19年10月からの25歳以下の女子が勤労挺身隊として動員されるようになり、同じ10月21日には明治神宮外苑競技場で全国の大学高専の学徒出陣壮行会があり、年末からの学童の縁故疎開、空襲に備えての延焼防止空地・道路を作るための建物の強制取り壊しなど急速に国内の戦場対応が進んでいった。

- 北海道はまだ B29 がマリアナ基地爆弾を抱えて飛んでくるには遠方に過ぎて、本州南部や関東のような戦禍を具体的に受けることはなかった。札幌のあたりにはまだ流血の戦争はなく、敗戦へのひそかな心配と、物資不足と、防火訓練の域を出ない毎日であった。しかしながら、食料不足は次第に激しいものとなってきて、19年の終わり頃には白い米をおなか一杯食べたいというのが次第に都市にすむ人間の最大の願望になっていた。札幌の人口も20万人を超えた。統制経済で小樽などから経済活動も移動したことによる。いつの事だったか記憶は定かでないが、父に連れられて母の手製のリックサックを背負って、壮瞥の祖父のところへ行った。食料がなくなり田舎に調達を頼みに行くことになったのだと思う。小学校の一年生のとき初めて訪ねてから、二回目であったようにも思う。途中に行ったかもしれないが、はっきりした記憶がない。その年の6月に元の壮瞥駅と有珠山の間で田んぼが隆起して、昭和新山が出来つつあった。祖父の家の縁側から夜には狐の嫁入りのように赤く山が縁取られてきれいであった。昭和新山の日々の成長を記録した「三松ダイアグラム」で有名な郵便局の三松さんの家は祖父の家の数軒新山がわの坂下である。ダイアグラムとほとんど同じ位置から昭和新山の出来るのを見たことになる。B29 を警戒して、灯火管制をして明かりを外に漏らさぬようにしても、昭和新山はどこからでも見える大灯台のようなもので、空からも潜水艦からも北海道太平洋沿岸の位置指標であったと戦後に聞いた。行きは東室蘭経由であったと思うが、帰りは胆振縦貫線で倶知安に出て、倶知安駅で床に座り一夜を明かし、次の日の昼頃札幌へ帰ったように思う。子供の背には米1升とりんご数個が精一杯の荷であった。父はもっと沢山担いでいた。列車は満員で、もちろん座席に座れるはずもなく、通路にぎっしりと詰まって立ちん坊であった。いつか座って列車に乗ることがあるのかなと思った記憶がある。これで我が家はしばらく生き延びたわけである。買出しの記憶はこの一回だけである。あとは畑を耕して出来た芋を食べていた。
- 6年生の時、初めて全優の通信箋をもらうことになり、時々ついた修身の良と習字の良がなくなる。6年男子組みの級長になる。いわば、付属国民学校の代表生徒ということであり、行いが不足であれば大目玉を食うことになる。7月であったか、銭函（札幌から小樽よりの日本海沿岸）に海水浴に行くことになった。まだ、海水浴に近距離なら行ける状況に北海道はあったということである。小雨模様で決行が決まらず教室でがやがやしていた。女子組みの誰かが「行くことになる」とか言ってきたりしてわいわいやっているところに、担任の伊藤先生がやってこられて、ごちゃごちゃ言っていることに、先生自身の不機嫌を掛け合わせて級長である小生に雷を落とし、一発見舞われてしまった。先生に殴られたのはこれが始めてであり、級長を辞めさせるぞと怒鳴られた。結局海水浴には行かないことになり、いやな思いでだけが、終生残った。その後、父が友達数人とともに銭函の先の朝里に泳ぎに連れて行ってきて、この年の夏の海は落着。

- 6年生の夏休みは「国民皆泳」運動で、中島公園の50+25mプール（無蓋のプールで、いつも濁っていて、中でオシッコをするのがいてションベン・プールの別名があった）で水泳教室が開かれた。泳法は現在と違って和式であるから、速いのはクロールでなく抜き手であり、平泳ぎ、背泳ぎは同じであるが、横泳ぎが抜き手の次に速度が出て長距離を泳げる。小生にとっても、横泳ぎが今でも一番楽に速度を出せる泳ぎで、今もってクロールは苦手である。この夏は1000m連続泳いだという免状をもらった。中川光二君とプールの帰り、あまりの暑さに行啓通りでアイスクャンデーを一本ずつ買って食べた。10銭ぐらいであったと思う。キャンデーといってもこの頃は単に色つきの氷であり、ちょっとした味がついている程度であった。当時の衛生状態からして、我が家ではアイスクャンデーは食べることは法度であり、中川君のお父さんは北大の内科の教授で、おそらく我が家より禁令はきつかったであろう。二人とも禁令を破って買い食いをしたことの後ろめたさに、無口で家までとぼとぼと帰った。今ごろの子供では考えられない違った時代である。
- 6年生の子供にとって最大の問題は中学への進学である。当時の旧制の学校制度を若干説明しておく。国民学校初等科（入学のときは尋常高等小学校尋常科）があり、その上に義務教育の高等科2年がある。付属にも併設されていたが、札幌には男子2校、女子1校の独立の2年制の高等国民学校（高等小学校）があった。義務教育は6+2年で計8年であった。初等科6年生と高等科の1・2年生は、旧制中学を受験することが出来る。旧制中学は5年制で昭和20年には、庁立札幌第一中学校（いま札幌南高と称する新制高等学校となる）と庁立札幌第二中学校（のちに札幌西高）、札幌市立中学（のちに廃校となり、一中と二中が新制高校になる折に分散収容される）の公立男子中学3校と、庁立札幌女子高等女学校（のちに札幌北高）と市立札幌高等女学校（のちに札幌東高）の2校があった。私立は北海中学、光星中学があり、女子は藤高等女学校、北星高等女学校、静修高等女学校、大谷高等女学校などがあった。公立は学区制を半ばとっており、各校250人の定員のうち125人が学区に割り当てられる。残りの125人については北海道全道一区で、トップに行く札幌一中への門はきわめて狭かった。附属国民学校が属する学区は市立中学で、札幌一中へは全道区の125人の中にもぐりこまねばならない訳である。三吉神社へ怠けず勉強を続けますと朝参りに行った理由である。生涯の中で最大の関門であった。ほかに工業と商業の公立私立実学校在った。
- 中学を5年で卒業するか、4年から飛び級するかで、旧制高等学校または北大などの大学予科を受けることが出来る。旧制高等学校は3年で、第一高等学校（東京）から第八高等学校（名古屋）までのいわゆるナンバースクールと松本・水戸・山口・東京・大阪高校ほかの地名の付いた高等学校が加って、リベラルアーツを中心にすえた教育を展開し、大学の前期教育を、寮生活を大きな要素として行っていた。北海道・台北・京城のいわゆる外地の旧帝国大学は、高等学校からも進学できるが、大学自身が3年

制の大学予科をもっていた。東大、京大、九大、東北大は旧制高等学校から主に進学する。阪大、名大は後に遅く発足する。慶応、早稲田、明治、同志社など私立の大学の数は多くなかった。北海道には皆無であった。

- 戦時中であり、入学試験といっても中学の選抜は内申書と口頭試問、身体検査などが中心であった。受験番号が 525 番(どちらから見ても 525 で覚えやすかった)で、白布に番号を墨書したものを胸に縫い付けて試験を受けた。受験勉強を特に何かするということはなく、日ごろ習っていることからの出題である。どのような試験を受けたか、まったく記憶がない。準備をしないといっても、少しは練習をしたら良いというので、父が勤めていた庁立高等女学校の竹森健夫先生が近くに住んでおいでだったので、参上して模擬面接を一度していただいた。万葉集の歌の数はいくらありますかと問われて、万といたら笑われてしまい 4500 首ですよと訂正されてしまった。あと何を聞かれたか記憶がないが、奥様に当時はもう滅多にないようなお菓子をお土産に頂いて帰った。竹森先生は後に新制に切替えられた道立札幌第一高等学校に転任してこられて英語を直接お習いすることとなる。戦時中の庁立は戦後に道立と改められた。後に、藤女子大学の発足に際して英文科の教授になられた。旧制中学の多くの先生が、新制大学とりわけ私立大学・短期大学の発足と共に、大学の教員になられた。統計で言えば、今日大学教員を称している先生の数と、旧制中学校の教師の数はほとんど同じである。大学の水増しと見るか、日本の教育水準がなべて上がったと見るかは視点の相違である。

昭和 20 年 4 月旧制札幌第一中学校の一年生となる

- 幸いにも付属国民学校からは初等科から 6 人が、高等科一年から 2 人が札幌一中に入学できた。8/125 であるから相当の高確率である。庁立 2 中、市立中学、庁立高女、市立高女などにほとんどの級友は進んだ。後日、親友の赤岩君と中学の入学試験の話をする事があった。彼のいた幌西小学校は札幌山手の住宅街で地域のレベルは高い。小生が札幌へ出てすぐ住んだ南 9 条 16 丁目のすぐ西の 17 丁目にその学校はあった。後に衆議院議員となる横道節雄氏(現衆議院副議長、元北海道知事横道孝弘氏の父上)が日教組の委員長となる前に幌西小学校の先生をしていて、赤岩君たちの進学指導の責任者であったという。先生が家の横を大きな体で通勤するのをしばしば見た思い出がある。赤岩君は元気がよく好成绩であったらしい。幌西小も市立中学の学区で、札幌一中への入学は難しいことのようにであった。7 人が合格したという。6-7 クラスから 7 人であり、付属は 6 年生 1 クラス 38 人から 6 人であるので、付属は別格だよなど後になっても言われたものである。入学後級長をしたことがあるものと聞かれて、クラスの大半が手を揚げたのはこのような事情によるものである。学区内からきた仲間も優秀なのが多かった。いい仲間にもまれて中学・高校は幸いなことが多かった。三吉神社さんにはすぐご報告に行ったし、今でも折々にお参りを欠かさない。氏神様

のようなものである。

- 一年生になって配属されたのは4組で、担任は数学の水野先生であった。一中に長く務められた名物先生で、大きく太っていて色白であだ名を「ポテト」先生という。級長は須田君で農学部の教授のご子息で札幌農学校以来の歴史のあるクリスチャンのおうちと聞いた。大学の南西の「魔の踏み切り」の近くの由緒ありげな家にすんでいた。静かな人で、のちにクリスチャン女学校の北星学園(女学校から始まり今は北星学園大学まである)の先生になった。戦争が激しくなり、教練の強化がはじまり、週2回の教練とプラスの座学があった。教官は小樽高商を出た予備将校の黒沢先生(少尉)で赤岩君の3組のクラス担任でもあった。4月に中学に入って、8月に戦争に負けてしまったので教練を受けた回数はそう多くない。しかし大日本帝国で軍事教練を受けた最後の学年、最年少生徒ということになる。12才であった。
- 札幌一中は南16条西6丁目にあり、学校の裏は当時では珍しいアスファルト舗装の東校庭を隔てて豊平川に面している。西側には山鼻線が南十六条で山鼻西線に変わり師範学校のほうに南進して右折する。正門の北面し、2丁ほど先に静修女学校があり、その西側が南16条の電停でいわば一中前の電停である。静修女学校の先を2丁ほど行くと北海道護国神社があり、クラスが交代で掃除の奉仕をした。横を通るときに敬礼を忘れようものなら、どこかで見ていた上級生にビンタを食らわされる仕儀になる。校庭は一部芋畑になり、勤労働員にいて学校にあまり姿を見せない、3年4年の教室(南棟)には陸軍の兵隊が駐屯していた。部隊が教練や軍事活動をしていたのを見たことがないから、移動の際の中継地などであったのかもしれない。たいした数ではなかった。いずれにしても敗戦までの4-5ヶ月のことである。
- 教練は、当時の戦況を反映して匍匐前進して、敵に手りゅう弾を投げるといったようなものが実戦風のものであった。唯でさえ質の悪い衣服の肘や膝がすぐ破けてしまいそうになる。制服は国防色(カーキ色)の北朝鮮の金主席の着ているような形のものである。中国の毛沢東時代の人民服を覚えていただければよい。軍事教練はどここの国の軍隊も同じで、分列行進の練習から始まる。鉄砲を撃つところまで行かないうちに、戦争に負けてしまった。第一種の匍匐というのはひじを立てて、両手に銃を捧げて進む、第二種になるとべったり伏せて銃を曳いてにじり進む。逆だったかもしれないが、敵前に近づくと、びったり伏せて頭も上げずにじり寄る。ちょっと周りを見ると、途端に「戦死」と教官にどなられる。手榴弾は記憶によれば半径6m以内は殺傷力があるとのことであった。模型の重い手榴弾を手にとって、中学一年の小生では第二種の匍匐で平らに伏せたまま、6m以上も投げられそうもない、とどのつまりは自爆かなとも思った。
- 帽子は国防色の戦闘帽で、一中は白い細い線を2本まく。北大予科は黒い丸帽に白い線を3本まく。北海中学は黄色線を2本である。二中の線はもっと太い白線だったように思う。帽章は雪の結晶の中に、中の字が入っていたがすでに真鍮の帽章は手に入

らず、先輩に譲ってもらうか作るしかない。僕らは、本物の帽章をストーブで熱して鋳型として、当時の一円（1 銭？）が亜鉛であったのを流し込んで造った。一中の一年生の記念写真の徽章は手製の亜鉛製である。靴は無いから、夏は下駄である。上靴などというものは、それ以来高等学校で男女共学になる 3 年生まで夏には履いた事がない。裸足の憲ちゃんである。みんなそうだった。冬は長靴を学校の外でも校舎の中でも履いていた。冬に上靴を履き出したのはいつの事か覚えていない。

- 中学入学祝という事で、上野康雄君のお母さんが足立民治君と僕を当時札幌に一つしかなかったグランドホテルの 5 階の正食堂に招いてくださった。上野君の病院が時計台の近くで、お婆さんがホテルを良く知っていたためにこの時代でも限られた食事を供していただいたのだと思う。フルコースであったと思うが、ジャガイモ仕立てのスープに、春雨のカレーライスがメインであった。コメはもう無く、なぜ春雨があったのかは謎である。北大時代、とくに総長になってからはグランドホテルをしばしば利用し、いまでも札幌へ帰ると昼食をとったり、泊まったりする。フロントがお帰りなさいと迎えてくれる故郷の宿である。高等学校 1 年ぐらいのころ、バンクスというミシガン大学の先生がアイヌの研究で北大に来ていて、佐々君のお父さんがフルブライト関連で便宜を図ってあげていたらしく、佐々、赤岩、岸田と僕を会話の勉強に紹介してくださり、週に一回ぐらいずつ 1 年弱勉強した。その折、待ち合わせはグランドホテルのロビーである事がしばしばあり、バンクスさんはホテルのロビーは道路と同じ公共の場であるから遠慮はいらないとのことであった。長靴を履いた高校生には入り難い空間であった。長じて常時利用のホテルとしたので、少しは借りを返せたかと思う。北大退官のパーティーもグランドホテルのお世話になった。
- 教科書も辞書もまったくといってよいほど無い時代である。一年生のときの英語の教科書はクラスに 20 冊ぐらい（？）しかなくて、くじ引きに中らなかった生徒は教科書を書き写すしかない。若しかしたら、新聞紙のように刷ったのを折って切ったのだったかもしれないとも思う。はっきりと思い出せない。幸いに 1 年 4 組の友達で家の近くにお父さんが北大の農学部で助教授をしている吉川君という人が居た。彼がお父さんのタイプライターが使えるというので、最初の 2 課か 3 課を自分たちで作ることになった。英語の勉強の最初がタイプライターで見よう見まねに教科書を作ることだった。単語も何も知らないときであるから、アルファベットを一つずつなぞってである。その後は、タイプで教科書を打った記憶が無いのでそのうちに教科書が来たのかもしれない。This is a pen. That is a book. That is a warship. This is a battleship. などなど、といったのが第一課であったように覚えている。Warship が軍艦で、Battleship が戦艦であると習った。このごろ軍事知識の無い放送局や大新聞の記者が平気で某国の戦艦がなどと言ったり書いたりする。今世界中に現役の戦艦などないから、Warship の事を言っているのだらうと思う。不勉強な事である。閑話休題。今度は、英語の辞書のくじ引きがあった。クラスにコンサイス英和辞典が 5 冊ぐらいだっ

たと思う。僕は籤運が余りよくないから当然中らない。隣のN君が中ったけれども、要らないからお前が要れば譲るという。結構の値段がする(5円くらいだったか)が、ありがたく譲ってもらった。戦前に刷ったもので、インデアンペーパーの本格的なポケット辞典である。このころ、紙巻タバコが無くなり、インデアンペーパーをタバコのみは手巻きタバコを作るのに使っていたという。配給されたのは戦前のストックであったのだろう。僕らの一中では、安延三樹太校長先生が英語は必要であるとして我々に十分な時間を当ててくださった。他の中学で、敵性語であるとして英語教育を止めた学校がたくさん在る。我々は幸いであった。しかも「月月火水木金土」の休みなしの海軍風であるから、進度は相当のものであった。戦争に負けた夏休みまでにずいぶん進んだ。僕はこれについて行けなくなって、相当の間英語で泣く事になる。安延先生は旧制第一高等学校、東京帝大の本格派の校長さんで、戦後藤女子大学の学長になられた。

- 戦争が末期になって、勤労働員が普通のことになって2年生以上は学校にあまり来ていなかった。5年が無くなって、4年が最上級に短縮されていたようにも思うが、3年4年は援農で農家へ、上級は工場に勤労働員で行っていた。学校には体の具合の良くない上級生が若干いて、軽労(働)さんと言われていた。3年生、特に4年のクラスが勤労働員から学校に戻ってくるという、その間は緊張が一時に全校を走る。街で上級生に敬礼をしないやつ、服装の緩んだやつ、神社とりわけ近くの護国神社の裏道を敬礼せずに通ったやつ、いろいろの事で説教を食い焼きが入る事になる。その反面、上級のすばらしい先輩との出会いもある。
- 弁論大会というのが一中の伝統の中にある。弁論部というのが在って、いわゆる文系の唯一のクラブのようなものであった。全校生徒が講堂に集まって、校長先生以下全教員も出席する。両派に分かれて団体戦で行われる弁論合戦(今で言うディベート)を行い、全校生徒の投票(左右に分かれた数)で勝敗を決める。小生は正規の弁論部員であったから当然参加するが、その他選抜で(方法は知らない)一方が5-6人ぐらいのチームを作り、先鋒、中堅、・・・、副将、主将と交互に順位が進んで終わる。一年生の僕は2, 3番目であったと思うが何をしゃべったのかまったく記憶が無い。そのときの討論の題は「日本は南進すべきか北進すべきか」という題であった。この春(2006年)亡くなった、熊谷直博君がその時のことを覚えていて、彼は僕の反対側で弁じたらしい。熊谷君はわが学年の成績トップで蛭雪時代の全国コンテストの一桁組みであったそうで。後に東大法から小和田さんと同期に外務省に入り、ケニヤやスエーデン大使を経て、迎賓館の館長で退官した。弁論部では付属以来の竹馬の友の中西章一君がわが学年のエースで、のちに学友会の会長をし、小生も執行部のメンバーとなる。一年上に後に東京第二弁護士会の会長となる平井さんがいて、彼も一代前の学友会会長となる。弁論部の3年生には後に気象庁長官となる菊池さんなどもいて、この弁論大会は中々のものである。「南進すべきか北進すべきか」などという話は、戦後に

なって見れば、ゾルゲ事件の折にすでに決着が付いていることで、関東軍は南へ、ロシア軍は東部戦線へと移動済みであり、二次大戦の終わるころ論ずる議題ではない。中学生が何を論じたのか、記憶も無い。幼友達の佐々直道君も僕と反対側の陣営でとつとつと弁じていたのを思い出す。講堂の高い演壇の片隅に「破邪の剣」というロダン風の高さ2 m以上もある剣を振り上げた大きな石膏像があったのが記憶に強く残っている。旧制中学には立派な講堂、雨天体操場、武道場などがあり、今の新制高校よりもはるかに整っていた。

- 札幌一中のもっとも有名な伝統行事は雪戦（せっせん）会である。雪を踏み固めて造ったブロックを積んで、チェスの城のような塔(6 mぐらいか)とその前に高さ 2.5m ぐらいの城壁(前城)を作り一組の城砦とする。南軍と北軍に別れそれぞれの城砦から出撃し、相手の城壁を越え、本城(塔)に至れば人梯子を組んで、エースがそこを駆け(這い)上がり、塔の上の旗を先にとると勝ちと成る。前城の突破の際は、壁の上からの守備側の反撃がある。殴ってはならず、平手で押す事を原則とするが、冬の素手がかじかみ、握りこぶしとなり雪を血で染める事になる。小学校生のとき一度見に行き、棒倒しなどと勇壮な一中に魅せられたものである。一年生の夏に戦争に負けて、占領軍からかかる軍国的な競技はけしからんという事で、我々は雪戦会の無くなった最初の学年となった。しかし春から、南軍と北軍の応援歌・優勝歌を上級生から教えられ、今でもちゃんと歌える。子供のときの記憶力はすごいものである。人梯子の組み方を運動場の肋木を使って何回か練習した。百人規模で人ピラミッドを造るのであるから、下の2段ぐらいは大変で、奥に入ると暗くて息も出来ない。たいていは高等科からきた体の大きいのが基盤の壁側を勤める。この一中のバンカラが嫌いで、二中へいった人もある。卒業論文でご指導いただいた、尾崎晃先生（当時河川の助教授で、後に港湾工学の教授）は物静かな大紳士で、ご自宅が二中の前ということもあったが、一中に行こうとは思わなかったと話の隅で伺った事がある。ことほど左様に、札幌一中と二中の気風は違う。後の札幌南と西高校である。娘が二中の末の西高校で、息子は父久憲が戦時中働いていた庁立女学校の流れを汲む札幌北高校である。高等学校の男女共学再編成で昔の伝統はほぼ消えたが、一時ではあるが南高校にはいささか素朴な気風が残ってはいたように思う。

戦況は不利となり、次々と負けが込み昭和20年8月15日降伏に至る。

- 3月10日陸軍記念日(小生の誕生日でもある)、B29、300機が東京を夜間爆撃し十万人以上の死者を出す。続いて名古屋、大阪、神戸が爆撃される。無差別じゅうたん爆撃で日本の大都市はほとんど灰燼に帰す。下町で焼け出された縁戚に人が、札幌へ逃れてきて惨状をきく。3月に硫黄島守備隊が全滅しその後、ムスタングP51が直衛戦闘機としてB29に随伴できるようになり、昼間爆撃も始まる。4月1日沖縄本島に米軍上陸、6月23日守備の軍団の組織的戦闘終了。硫黄島の1ヶ月の戦闘と沖縄の

2ヵ月半の激闘は太平洋戦争の極限の戦いであり、毎日の新聞が両軍の戦線の移動を地図上に示した。硫黄島ですり鉢山へじりじりと後退していく日本守備隊の戦いを新聞紙上で見て、栗林兵団の玉砕をついに来たものと理解した。沖縄戦の様子も、中部で切り離された島の守備隊の主力が南へ南へと後退し、ついに南部で全滅し組織的戦闘が終わり、牛島軍司令官と長参謀長の自決(戦死)が伝えられた。サイパン島の全滅と共に住民を巻き込んでの日本国土での初めての凄惨を極めた地上戦闘である、沖縄戦の痛みは60年たった今も消えない。小生には沖縄の南部を再訪する元気はない。現地の痛みを考えると、その時代に次が我々の番であっただけに心が痛む。北から、攻め込まれたら北海道が、そして真っ先に我々が同じことになっていたであろう。

- 中学生になって初めて半道(1/2里、2km)ほどの道のりを通う事になる。靴がないから下駄履きである。学校から1里までは電車に乗る事が出来ない。すべて徒歩である。当時の札幌は人口25万人ほどで、市内の大半は4キロ圏内であるから、汽車通学生と病気のために特に許可を得たものだけが電車通学できる。襟に2cmくらいの白布の担任の印を押ししたものを縫い付けておかねばならない。着たきりすずめの戦時中だから良いようなものの、服を変えたら布パッチを縫い変えなければならない。今の札幌南高校から北大前の北14条あたりまでが徒歩圏である。友人の岸田君は北11条の北大正門のあたりに住んでいたのだから歩いて通っていた。工学部の教授時代に小黒永子さんという南高の教頭先生のお嬢さんが秘書でいて、旧札幌一中の西校庭の横に住んでいた。ある日、地下鉄のストがあり彼女から「スト終わったらすぐ出勤します」というでんわがあった。中学時代なら徒歩で通学する距離であり、瞬間時代の変化を思った事を思い出す。山鼻線(東線)の一中前(南16条)から東本願寺前(南6条)まで電車線路の上を下駄履きで落ちずにずっと渡って行ったことがある。落ちなければ明日の試験は良い具合であるという賭けをしてある。戦争に負ける直前の6月ころの事であったと思う。南16条から6条まで1kmほどの間一台の電車もこなかった。戦時中は何処へ行くにも歩くしかなかった。当時電車の車掌さんは女学校の上級生の勤労働員の人があたっていた。(全部ではなかったと思うがたくさんいた)同級のK君のおねえさんに、三越前からどこかまで(忘れた)ただで乗せてもらった覚えがある。
- 中学に入って雪が解けてまもなく、大腸カタルなるものにかかって10日以上学校を休む事になる。何の事はない栄養失調にかかったのだとおもう。弟が幼いころお世話になり命を救っていただいた、華岡先生(華岡清州のご子孫とのことであつた)の小児科病院が一中の前にあり、先生が「きみならしょうがない」といって中学生になっても見ていただいた。英語の勉強が始まったばかりであり、大腸カタルによる欠席は進度がどのあたりであつたか覚えていないが、小生の中学低学年の勉学に大きなダメージを与える事になる。小生はかなり不器用で、何事も立ち上がりかスムーズでなく、新しい事に向かうにはさうとうの努力のいる性質である。英語については、戦時の事で社会的なインセンテブは全くなく、自身の家庭にもまったくの蓄積や雰囲気はなく、

学校での勉強だけが知識の入り口であるから欠席は決定的なことであった。科学や数学は判らなくても勉強の道筋を努力で補えるが、3歳の子供でもイギリスではしゃべっている英語には初学者にはわからぬルールばかりで、学ぼうにもどうにもならず本当に泣いたものである。なぜ、その前置詞が at, on なのか、なぜ for で of でないのか？ 考えても考えてもケースをもたぬ1年生には動きが取れなかった。頭から暗記して、鸚鵡返しに答案を書けば良いものを、余裕を失った子供にはなすすべもなかった。今にいたっても前置詞、さらには冠詞に悩まされている。畏友カリフォルニア・デービス校教授の浅野孝（ストックホルム水賞の受賞者、南高と北大の後輩）さんも、最後のところは奥さんのホーリー（Holly）さんのご厄介になるらしいと聴いて、いささか慰められている。

- 中学一年二年の成績は惨憺たるもので、学年の半ば一寸上ぐらいの成績に低迷していたのだと思う。学校へ出た日に国語の時間に、題は忘れたが「日和喜び人豆を打つ」という文があり、僕が読まされた。丁度その日は良い天気、学校に久々に出てきたので、早速「日和豚」という綽名をつけられてしまった。「日和」という綽名を知っているのは中学一年の同級生である。ちなみに「豚」は卑しめ語で、みんなの仇名の前か後ろにエテとかカウ（牛）などをつける事が多かった。赤岩君は大きいので「赤象」である。一年生の一学期は、子供にとって一寸したつまずきが、総体としての長期にわたる大きな停滞になるという大切な教訓をえた学期である
- 短期間であるが郊外（厚別）の農家に援農にいった。秋蒔き麦の刈り入れと、遅い田植えの手伝いである。腰を落としての麦刈りと田植えは中学一年生の元気だけではやり遂げられない重労働と忍耐であった。未だにお百姓さんには感謝の念を忘れないのは、母に「ご飯粒は一粒残さず食べないとお天道様に申し訳ない」といわれたこととの相乗学習である。あまりも役に立たない中学生であったのだろう、ある時は田圃の水路の泥糞捌いをするように言われた。沢山取れた。グスベリの実が農家の庭先に沢山なっていておいしかった。お米のご飯をたっぷり食べさせてもらえる事がありがたかった。家へ帰るときに、大きなおにぎりを二つお土産にもらった。家には何よりの土産であった。
- 5月の末か6月の始めであったか、一年生が2梯団に分かれて島松の陸軍演習場を開墾して蕎麦を植える事になった。昭和11年帝国陸軍の最後の大演習が行われ、昭和天皇が大元帥として最後の大演習観閲をされたのがこの島松台で、その折北海道大学の農学部（竣工して未使用であった）が大本営となった。陸軍の主戦力が此処ではもう演習する事もなくなって、開墾して食料を補おうという事になる。札幌から1時間くらいかかる千歳空港近くの演習場で、今も自衛隊の演習場で戦車が走り、春は札幌市民のスズラン狩りに開放されて賑あう。1週間くらい居たのであろうか。陸軍が残っていた三角兵舎の両サイドの板敷きに毛布を敷いて、1棟1クラスずつのごろ寝であった。中央は通しの土間で、両端の突き当たりに入り口がある。便所は外であったと思うが思

い出せない。高等科からきた大柄の仲間が切り株や根っこの引き倒し役で、ちびの我々は掘り役、石の穿り出し役である。天塩の開拓部落育ちの小生であるが本当の開墾をしたのはこの時だけで、そうとうに草臥れた。夜中に外で焚き火をして「敵機に見つかる」と教官に怒鳴られる。真っ暗な原野は鼻をつままれても判らない。懐中電灯など有ったようにも思えない。戦争に負けてから、秋に別な組が収穫に行った。その間全く手入れをしないわけであるから、種を5俵蒔いてほぼ5俵の収穫であった。働き損みたいなものである。それでも戦後の10月ころ、収穫を粉に挽いて、生徒一人に封筒3/4ぐらいの分配があった。休みに定山溪温泉へ行って、かぼちゃ汁の団子として仲間と食べた。もちろん砂糖などなく、定山溪で農業をしていた森下君(綽名はカウ：牛君)が家で取れたのを持ってきてくれたかぼちゃの甘味がほのかなだけである。敗戦後の気持ちが楽になったころの思い出である。

- 昼の弁当を持っていく事ができず、学校は午前授業が殆どであったように思う。「月月火水木金」と海軍の訓練並みで日曜の午前も課業があったような気もする。いずれ勤労働員に行くが一年生は勉強に専念するよにとのことのようであった。昼ごろになると、空襲警報が鳴り B29 が単機で白い飛行機雲を引いて高空を飛ぶのを時々見かけた。サイパンかテニアンを夜明前に飛び立って札幌には昼ころになってやってくるらしい。定期的に偵察に来るらしかった。爆弾を積んでは札幌までは来られないらしく、爆撃は一度もなかった。日本の戦闘機もまったく迎撃しないで、B29 は悠々と飛び去ってしまう。札幌が空襲されたのは、終戦の近くになってからの艦載機のボート・コルセアとグラマン F6F による朝方の銃爆撃である。軽川(今の手稲)から汽車通学していた同級の宝井英輔君たちが列車で銃撃され、車両の下にもぐりこんで助かったと聞いた。北朝鮮拉致事件被害者の横田めぐみさんの父親の横田君も同じ学年で、後に宝井くんと2人高校を出るとすぐ日銀へ入る。横田君はおとなしい人で、数奇な運命に翻弄されてこのような苦勞をするとは夢にも思わなかった。この空襲で、青函連絡船の殆んどと、釧路、室蘭などの港が徹底的にやられた。室蘭の日鋼は艦砲射撃を受け大煙突が倒れたらしい。4年生が動員で働いていたが死傷は無かった。日鋼室蘭は戦艦大和などの巨砲の作れるわが国唯一の工場で、狙い撃ちを喰ったわけである。水平線上まで来たアメリカの戦艦を迎撃できる兵力は日本にすでに無く、やられっぱなしであった。昭和新山が赤々と燃え、来寇する敵機動部隊の格好の夜の道しるべとなり、夜のうちに北海道沿岸に接近して明け方から撃たれてしまったようである。近年になって、札幌の丘珠飛行場の防空戦闘機掩蔽壕を狙った機銃掃射で、札幌市民が亡くなった事を新聞で知った。ずっと、札幌は艦載機に襲われたが、死人は出なかったと思っていたのは間違いだった。
- 8月15日午前中に付属国民学校へ一学期の通知箋をもっていく。一中ではなぜか一学期の通知箋を卒業した国民学校の担任に見せて判をもらってくるようになっていた。伊藤茂先生にあまり出来の良くない一学期の成績を見せて判を頂く。伊藤先生に今日

正午に大事な放送があるからすぐ家に帰って聴くようにと言われて、職員室にも入らずに、職員玄関で判をもらって帰る。家まで歩いて10分の距離である。正午に、終戦の詔勅が雑音激しく流れる。天皇の声を聴いた始めであり、独特の抑揚の勅語は、内容をよく記憶していないが、暑くせみが鳴いていたポプラの木のたたずまいと共に今も忘れることがない。「ポツダム宣言を受諾し」「しのび難きをしのび」「太平を開かん」といった言葉を切れ切れに覚えている。負けたのだという虚脱感で、ほとんど何の感情もすぐには出てこなかった。東京から焼夷弾にやられて逃げてきた知り合いの話、新型爆弾（原子爆弾）に広島と長崎が続けてやられた報道、ソ連が中立条約を破棄して宣戦を布告して来たことが、沖縄の失落以来続いてきて、ほとんど壊滅に瀕していた食料事情と共にくるものが来たと思った。しかし何がなにやらわからなかったのも本音である。その夜だったか、次の日であったか灯火管制が解けて、窓の黒い遮蔽カーテンと電灯の黒い頭巾のような覆いが外れてなんとなく緊張が解けてきたのも事実である。その日は我が家でどうしていたのかまったく思い出せない。

- 次の日、がらんとした一中に行ったが特段の指示もなくまだ休み（夏休みはなかったがお盆で休んでいたのだと思う）で、何人かの友人が学校に出てきていた。なぜに、盛田君だったのか覚えていないが、学校の裏を流れる豊平川の堤防に二人で黙々と座ってどうなるのだろうか、ぼそぼそと話したことを覚えている。教練用の銃器をしまっておく倉庫にはもうまともな銃は無く、日清戦争時代の単発の村田銃が若干と菊の紋章を削り取ったぼろくその三八銃がいくらかと、ほんの一二丁の99式のサンプルの小銃があるだけであった。多くの銃はもう戦争に持ち出されて中学の教練用には残っていなかった。学校の東校庭の南側の豊平川堤防の横に、狭窄弾（近距離用の演習弾）射撃練習用の標的土手があり、負けてから撃つことがあった。
- 勤労働員に行っていた上級生が次々と学校に戻ってき、軍に接収されていた南側の校舎はすぐに空家となり兵隊はすぐに立ち退いてしまった。暑い夏で、昼休みに豊平川を下の豊平橋まで1km以上も流れ下って、禪一つで堤防を走って学校へ戻ってきたら午後の授業が始まっていて、手渡しでズボンとシャツを後ろのドアから出してもらって教室に入り叱られた。しばらくの真空状態を味わうことになる。この年の終わりに上流の真駒内に進駐軍のキャンプ・クロフォードができ処理をしない水洗便所などの排水が垂れ流されてそれから20年ほどのあいだ豊平川は泳げない川となる。クロフォードが返還されて、真駒内の1972年オリンピック開会式スタジアムとなり、これを契機に札幌の下水が急速に整備される事になる。
- 敗戦時の校庭は半ば以上耕されて、芋畑、かぼちゃ畑となり、やぎが堤防につながれて悪童がひそかに乳を盗み飲みしていた。陸上競技や雪戦会をする400mとラックのある東校庭の南東の電車線路脇にプライマリーグライダーの格納庫があり、一度だけ上級生が綱を引いて30mくらい低く飛ぶのを見た記憶がある。戦後は独身の先生方の住処となり、しょっちゅう入りびたりで遊びに行くので、教頭の新谷先生からあ

そこはおまえたちの遊び場でないとお叱りを頂いた。そこに盤居しておいで佐々木先生（後の札幌東高等学校へ再編された折の3年の担任で物理の先生）、橋爪先生（山を一緒に歩いてくださった後に北高に移られた生物の先生）には人生の前半で大変にお世話になった。

昭和20年10月米軍札幌に進駐、食べ物のない21年の正月を迎える。

- 負けた事による大きな混乱は、中学には急には現れてこなかった。教練はなくなり、現役の配属将校（伊達陸軍大尉といったと思うが、市内の中学を総括して担当していたらしく一二度朝礼で姿を見ただけであった）はいなくなった。具体的に我々の教練を担当していた石黒、黒澤両先生は予備役の中尉と少尉であったと思うが、戦後も学校に残られた。我々は直接指導を受けなかったが、「万特」先生がいた。万年特務曹長の略号があだ名で、予備役の准尉であったと思う。黒澤先生は小樽高商（現在の小樽商科大学の前身）の出で、次の年には家業に戻られた。石黒先生は体育の教員に転進され、昭和25年であったと思うが高等学校体育大会で道立札幌第一高等学校と名をかえた庁立札幌一中のバレー部を全国準優勝に導く指導者となった。いずれにしても、5ヶ月足らずの、戦時中の中学生として、最後の軍事教練を受けた学年である。敬礼と分列行進ぐらいしかまとまった事はなく、後は対戦車攻撃の匍匐前進の訓練をやっているうちに負けてしまった。宣戦の12月8日を記念する各月の8日を大詔奉戴日と称していて、学年で札幌神社に参拝したぐらいしか記憶にない。同じ中学生でも、いた場所により、沖縄県立中学の同年次との戦争体験は極端に違う。成人してからであるが、原爆でほとんど瞬時に消えた県立広島一中の生徒の碑の前で、自分の運命が紙一重であった事を思った。アメリカの戦略空軍の絨毯爆撃で死んでいった同時代の仲間も少なくない。
- 「I shall return!」といってコレヒドールに部下を残してオーストラリアに一旦は逃げた、米国極東軍総司令官ダグラス・マッカーサー元帥がレイテを経、マニラを落とし、沖縄をつぶして遂に8月30日コーンパイプを啜って厚木飛行場に降り立った。この時から、昭和26年4月11日にトルーマン大統領に彼が解任され、リッジウェイ中将が朝鮮戦争から呼び戻されて占領軍総司令官を交代するまで、5年半余の実質の日本の支配者となるわけである。鈴木内閣は終戦で役目を終わり、敗戦後は東久邇宮内閣に代わる。9月2日米戦艦ミズリー上で降伏文書の調印式が重光葵日本代表とマッカーサー以下の連合軍代表の間で行われる。以後GHQ（連合軍最高司令部）がすべての基本的なことを指示し、日本政府は被占領間接統治下におかれる。

2007年放送大学長時代のメモ：敗戦までの12年間